
ドラゴンクエスト? 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

ナック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女

【Zコード】

Z2990R

【作者名】

ナック

【あらすじ】

3度の飯よりドラクエなオタクつこ娘、朝風沙耶は念願のドラクエ？を購入！！しかし、テレビを入れてもつかない。なんどもなんども付け直しても、つかない。そして気づいたらどんどんテレビに吸い込まれてゆき……！！ギャグ的ドラクエ物語！！笑いあり、恋愛あり、涙ありありの一次創作！お楽しみ下さい。

宝箱からじんじは（前書き）

この夢小説の主人公や？の主人公の名前は変えれないんで注意！！

今日は待ちに待つた、ドラクエ？の発売日！

隠れオタクな少女、朝風沙耶はドラクエが大好きで、今の所全作遊んでいる。もちろんこのことは友達には内緒だ。

「……アーティクル新作が出来たぞー。」

自分の部屋の小さなテレビに買つたばかりのプレステ2を置き、新品ほやほやのドラクエを差し込んだ。

プレステに電源を入れた。

お約束の序曲（ソーソンソッソーのあれ）が流れると思つたが、音どじろか、画面もつかない。

「あつれー？中古のプレステ買つたから悪かつたのかな…それともソフトがバグッたのかな…？まさかテレビが…？」

「ええーい！！電化製品は叩けば直る！！！」

バゴーとテレビにチョップをぶちかましてやるつと思つたが、

「うわわわわわわわわわー————!!?」
手が、手がテレビに刺さつてゐる。

「えええええっ！？ ちょ抜けないんだけどーーー！」

あがいても奥に手が進むだけだった。

しかモリノなど者は世新が出現してゐるとは

手はどんどんテレビは吸い込まれ
自分の体の半分まで入っていた
そして私は…

すぽんつ

テレビの中へと吸い込まれてしまつた。

「いやあーこんな所に宝箱があるなんてねえー兄貴いーー！」

小太りしたオッサンが言った。

「ああ、途中ドランゴとかいうモンスターに追われて死にかけたが、来て良かった。」

こちらはバンダナを頭に巻いた、クールな感じの少年が言った。

「せっそく開けるでやんすーー！」

「ああ。」

ガチャ…

宝箱はゆっくりと開いてゆく。

「なんだい、きのみでやんすか。」

バンダナを巻いた少年が手に入ったのはこのちのきのみだった。

いや、ここはエラクト風にしょい。

バンダナ（仮名）相はいのちのきのみをてにいれた。

「帰りやしょ、兄貴。」

小太りしたおやじはお腹を抑えながら言った。

どうやらお腹が空いているようだ。

「ちょっと待つて。奥に何かがあるようだ。」

バンダナ君は宝箱に手を突っ込みながら言った。

どうやらこの宝箱は一重層になっており、蓋を開けると奥に何かが見えた。

「あ、兄貴い……なんか動いてるでがす。気持ち悪いでがんすよ……」

怯える小太りのおじいだが（なんか名前変わってるよ）バンダナ少年は臆することなく手を探りつけた。

がしつ！

「うわあああああああっ！？」

「兄貴！？」

これは手だ。

人の手に違いない。

それも小さい……。

「ヤンガス！引き上げよう！」

「ええっ！？……わ、分かったでがす！！」

もしかすると誰かが宝箱に入ったに違いない！

そういう事は見たことがないのだが、一度本でそんな感じのを見た事がある。それに、バンダナ君は嫌な気しかしなかった。

「「セーーのおつーー！」」

ドガツ！バギツ！ボコツ！……

恐ろしい破壊音と共にその手は引き上げられようとしている。

「痛い痛いっ！うわなんか頭に刺さったああああ――――！」

人の声だ。それも女の子。

「よしひこべぞ……！」

全てが引き上げられ、女の子が現れた。
いやここはドラクエ風に……

女の子が現れた！

「あ、君は……！？」

「痛いよお……頭になんか刺さつてるよう……。」

いかにも泣き出しそうな沙耶の頭は木くずなどがたくさん刺さっていた。

「あっ、ごめん……ホイリツー！」

バンダナ少年はホイリとやらを畳えるとあら不思議。
沙耶の体はきれいに治っていた。

「あれ……？傷が……。ってホイリ……？？」

思わず叫んだ。

ホイリといえばドラクエでおなじみの回復呪文。
まさか……この人……本気のオタク？？

沙耶はバンダナ少年をジロジロと見た。

頭にバンダナを巻き、茶髪に変わった黄色い服に青の服も着ている。綺麗な色合いでがこの世の物とは思えないほどドラクエ?の主人公の服に似ているのだ。

……ん？ ドラクエ？

まさかこの人はコスプレしているのか？？

しかし周りも見るとなんじやこりや。

ど田舎でも家くらい建つてるよ？

「あのーお嬢ちゃん？」

小太りしたおっさんガ尋ねた。

ああ、この人忘れてた。

「君はどうしてここにいるんだ？ ドラペックタの子か？？」

少年が言った。

「…………トランペックト？」

「それは楽器でやんすよ。」

おっさんにつつこまれちょっと自尊心が傷ついた。

「つーむ。一応ここじゃあれだし、町で聞こつか。」

「……、おいでおいでと言う一人は歩きだした。

もしかして……これってナンパ？

いやいやいや！

そもそも二人はあのとき助けてくれたんだと思う。

テレビに吸い込まれたとき私は真っ黒なところに立っていた。

進んでみたら急に明るくなつてきて出口が見えたから手を伸ばしたら

ガツて捕まれて…

ああ、木が痛かったな……。

思い出すと痛みも思い出したからやめた。

もしかして……、やっぱドラクエ？！？

こつしてまたひとつ、新たな冒険の書が開かれようとしているので
あつた…！！

宝箱から「JET STREAM」（後書き）

今度は連載方二次創作です！

いまさらドライクエ？ww

どんどん入れてくつもりなんですよろしく！！

もしかしたら水飛沫超えるかも…。

み、水飛沫を浴びてもよろしくねつ！？

まさかの旅乱入（前書き）

キヤラクター紹介

朝風 沙耶

隠れ才タクな少女。 ドラクエ大好き。

武器は槍。 スキルは剣・杖・槍・弓・宝探し。

まさかの旅乱入

私は困り果てていた。

なぜならそこにはドラクエの人物であると思われる方がいるからだ。

いや嬉しいつちゃ嬉しいけど… 非科学すぎるつてゆーか…

ああ、そつか夢オチ？

そう思いたかつた。

「もうすぐトラペッタだよ」

バンダナの人はせいすい（最初香水と思つてびびつた。）を振りま
きながら進んだ。

夢にしたら現実的すぎるけど…

思わず私はほつぺたをつねつてみた。

……痛てえーよばか。

「よつやくついた。」ジジがトラペッタだ。」

そこは大きな門があつて立派といえる町並みだった。
おや、門の前には白馬に乗つた王子様が。

「あー、おっさん！」

とげとげぼうしが言つた。

「お前ら…なにか見つかったのかのう？」

「ナ、ナメック星人…………」

そう。王子様じゃなくて緑色をした妖怪だったのだ。

「ん？この子は誰じや？？」

バンダナ君はちらりと私に目をやつた。

きつと自己紹介しろって合図だらう。余分。

「えつと私は朝風…いやいや！沙耶です。なんか分かんないけど…」
人に助けてもらいました。」

苗字まで言つたらややこしことと思つたので名前だけにしておいた。

アサカゼサヤつて全部言われたらやだもん…

「そうだ俺たちの名前も言つてなかつたな。俺はエイト。とある理由で旅をしてくる。」

「あつしは…」

エイトってソフトの説明書にもあつたよつたような気がする。
先に説明書読む派でよかつた。

「でがす。よろしくお願ひするでかす…！」

「え？なんて？？」

「…聞いてなかつたんでがすか…？」

あ、名前言つてたんだ。

「あつしはヤンガスでがす！盜賊みたいだけど盜賊から足、洗つた
んで…！」

「ふー——————ん。」

私は明らかに興味無さそつに返事した。だつてあんまつおつさんの
名前なんて興味ないもん。

「あつしだけなんか冷たいよつな…」
ヤンガスはほつといて…

「わしせトロードじや。じつちせ娘のマーティアジやよ。」

え、娘？？馬のに？？

このナメック星人は頭がおかしいんじやないか？

「不思議に思う気持ちは分かるけど、今は後回しにしておいてもいいわよ。

君はあそこでなにをしてたんだ。」

エイトが聞いたので私はすべてを話した。

自分のいた世界のこと…

なにらかの事情でこじらせに来てしまったこと…

すべてを話した。

しかしこの世界がゲームの世界であることは、言わなかつた。
エイト達は驚いているようだが、最後まで聞いてくれた。
もしにこれが夢なのならばこの状況おかしいだろ?な…。

「つてわけ。信じられないでしょ?」

私はそこまで話して一息ついた。

自分でさえ信じられないのに、信じてくれないだろ?なと思つた。

しかし違つた。

「そうか…別の世界から……」

3人?はうとうんと首振り人形かのよつに領している。
あほか。

「え、信じてくれるの…?」

「ああ、こんなときに冗談言つよつた時じゃなこじの世界じや、やじなこととも珍しくないよ。」

そういえば思い出した。

たしかドラクエ?の主人公は別世界から来たという噂があるらしい
し…それをいえば私もそんな感じかな?

こんなこと信じないだろ?な絶対、と思つたがこじはドラクエの世
界らしいし…

「ふむ…それならいまお主は行くあてがないのじゃな?」

「あ、そうか。私お金無いんだ！」

現実世界でも無いのに… という愚痴はおいといじ。

「なら沙耶も旅についてきたらしいよ…いいでしょ？陛下。」

「ふむ。見たところミーティアと同じ年に見えるし、大歓迎じゃ！
！」

え、えええええっ！？

わ、私がドラクエの勇者様と一緒に！？

勇者とかは知らないが、冒険に出るというのは夢に見たことだ。
とでもうれしい。どうせ行くともないのなら……

「お、お願いします！」

旅の理由（前書き）

キャラ紹介

エイト　トローテーンの近衛兵士。

ドラクエ8の主人公　赤いバンダナがトレードマーク。

天然でたまにばかになる。料理は目が出るほど旨い。旨すぎるつ！

まじめそうに見えて、大の寄り道好き。

武器は剣。スキルは剣 槍 ブームラン 格闘 ゆうき。

旅の理由

「わあ～…どれにしようかな」

今私達は武器屋にいる。

私の武器と防具を揃えるためにエイトが買ってくれるそうだ。うれしいーー！

銅の剣はこんなのだつたとか、ブーメランがおもちゃのようにならしか

見えなかつたとか、いろいろ発見だらけだ。

私、女子高生でも『オタク』なんで…うれしいっすーー！

ひの木の棒つて本当に木なんだねーー！

とたんに思い出した、エイト達の旅の目的。
もちろん、説明書どうりの話であつた。

「そういえばなんでエイト達は旅に出てるの？」

宿屋でゆっくりといすに掛けた三人は話合っていたところだった。
ナメック星人がいなのはどうやら、魔物に間違えられたかららしい。

ナメック星人も大変だな。

「つい最近のことさ。俺はトローテーン城の兵士だったんだ。」

「それでは陛下。城の見回りに行ひてまこります。」

「あいエイト。いつもありがとのお…」

いえ、仕事なので。と適当に会釈しながら部屋を出た。

今日もいい天氣だ。

窓を見るとふと気づいた。

子供達がなにやら集まっている…。

目を細めてじつと見てみた。

不気味に笑う道化師がいた。

子供達は何も思わないのだらうか、その不気味な笑いにエイトは氣味悪くなつた。

「…見回りするか。」

一瞬、道化師と目が合つてしまつた。

にやりとこちらに笑いかけているようだ。

無視してエイトは見回りに出た。

胸騒ぎがする……。

自分は嫌な予感がとてもしているようだつた。

それから、一時間が経つた 。

空はさすがにまだ晴れていたのに嘘みたいに暗い。
まだ午後くらいだと思うがこの夜並の薄暗さは異常だ。
もしやなにかがあったのかもしれない…。

辺りを見るが、誰もいない。

まるで悪夢でも見せられたじるよつた氣分だ。

「いなーいなー……。」

散歩でもしにいつたのだろうか？

○

窓が割れた。

「から」もなく生えてきた根のようなものがある。根のようなものは生き生きと動き、エイトを襲いかかるうじ
た！

う、うわああああああああああう……？？

思わず目を瞑つてしまつた。防御のする暇もなかつた。

何をすればいいんだ！

その時はつきりと映つた。

目を閉じたことで真っ暗なのだが、確かに。青い光のようなものが。

それから根の音が消えた。

黙り、下がりながら目を閉じて泣きたい……

変わり果てた城の姿が。

動物も人間もみな、石化され、

城は根に守られるように絡まれ、

そして美しかつた城は、ボロボロの廃墟のよつた城になつていた。

その時、奇妙な笑い声が聞こえた気がした。

しばらくエイトは動くことが出来なかつたのだが、はつとして気づいた。

陛下！姫！！

ダダダダッと先を急ぎ、次々と部屋を見てまわつたがほとんどの道が壊れてなかなか動けない。

宝部屋…から馬のような声が聞こえた。

「陛下っ！姫っ！！」

ぱんと荒く扉を開けるとそこにも変わり果てた二人の姿が…。

白馬と緑色をした怪物。

一目で分かつた、二人だと…。

「エイトっ！無事だつたのか！！」

「へ、陛下！なにがあつたのですか！？」

二人はすぐそこまで近寄つた。

この部屋が一番荒れていた。

「あのドルマゲスの奴…。代々から伝わる封印していた杖を手にして……！」

ドルマゲスとはあの道化師の名前だ。

やはり、嫌な予感は当たつていたのだ。

「それで道化師は杖を奪い、呪いを放つて……逃げたのですね？」「そうじゃ、ミーティアは馬にされ……わしは魔物のようなものにされた。」

ブルルルウ……

悲しみは全て、姫の目からも語られていた。

二人は石化されず、別の生き物に変えられていただけのようだがどうして自分は石化しなかったのだろうか？

「とにかく呪いを解かなきゃいかん」

「どうやってですか？」

「ドルマゲスを倒すか、杖を破壊するか……。よし旅の準備じゃ！」

イト！

「え、ええっ！？」

「当たり前じゃひうが！ わしもミーティアもこんな姿なんていやに決まってるう！」

「わ、分かりました。少々お待ち下さい……！」

「とまあこんな感じで旅に出たんだ。ってなんだよその顔……？」

「だつて……ねえ？呪いだなんて……あるわけないじゃん？」

「だつてだつて！陛下も姫もあんな姿になっちゃったんだぞお……」

エイトと沙耶は子供のように口喧いでいる。

ヤンガスは半分寝てる……おこにじら起きる。

「だつてだつてだつて呪い実在してたら私、色々な人呪つてるよー。？兄とか兄とか兄とか兄とかかにとか……！」

「いやいや途中『かに』入つてんじやん！？つてゆーかお兄さん居たんだね！びっくりびっくり！」

「あの兄貴……沙耶嬢ちゃん……？」

ああ、二人が壊れたよホント…。まあ楽しそうだけど

沙耶も外見信じてなさそつだがもちろん信じてた。

だつていい子d……「説明書見てたからあー！残念！－！」　ちょ、
言葉さえぎるなつ！…つてか誰だよあんたあああー！

皆さん。

なにかと意味不だけど見てあげてください。

この子痛い子ですから…。

「あーーーー、いろんな意味で酷いや作者……呪われればいいのに
な……」

キヤツ、やめて？

とまあお遊びはその辺にしといて本編に入ります。

考え方もやめて武器を早く決めた。

「よし、武器を一めたつ！」

「木のやりか。うん軽いしいと懸つよ。」

木のやりなんて聞いたことのないのだが、この店だけのよひで氣に

入った。

槍使いもいいなあ。

旅の理由（後書き）

こんちはあ～ナックです。
只今水飛沫挫折ちゅーーーう（泣）
書こうと思つてもこっちの方がアイデアばかり出てしまい
えへっ

ヤンガスの泣く頃に（前書き）

キャラ紹介

ヤンガス こわもて風のおっさん。

しかもみんなからの扱いがひどい、かわいそうな人。
昔はアニマルヤンちゃんとか言われてたとか…

武器は斧。スキルは打撃 斧 鎌 格闘 人情。

ヤンガスの泣く頃に

「そりいえば、これからどこ行くの？」

今私達は、海のように広がる大地の中にただ立つて いるだけだった。つてか未だに魔物来ませんが。もしかしてバグッた？

「ああ、実はトラペツタの人々 水晶玉を洞窟で探してほしいって頼まれたんだ。」

「え、ドルゲマス…ドゲルマス…？あつゲルマドスかつ！」

「全部違うでやんすよ…。ドルマゲスですが。」

「ドルマゲスデガス…！？」

あ、ヤンガスはでがすつて口調だからドルマゲスか。覚えづらいわつ 「えーっと…ドルマゲス…？は探さなくていいの？？」

「んー…まあ、陛下もいいつて言つてるし、たまには息抜きもいいかと」

息抜きつて…私もエイト達も旅出たばかりだよね…？

ああーー…モンスターに会いたいわ早く…。

「あー…スライムだつ…！」

全く、モンスターは全然来ないし歩くの疲れたしなんかマップ、広くない？

「沙耶は右に回つてつ…！」

ああーー…アクシデントかなんか起きないかな？

「沙耶つ…！…いい加減にしろお…-----」
「は、はいいいいいいいつ…？」
エイトに怒られ、はつとした。

「おおつー・スライムだつー！」

「今かよつ！？」

ズテーン！！

「いやはや、これまた大きなこけかたですなーエイトさん。
「と、とにかく攻撃してつーヤンガスが死んじやうー！」

「あ、あつしなり……が、だ……」

ヤンガスは今にも弱小モンスター・スタイルに殺されそうだ。

てかっこ悪いよねー!! 応援してるから頑張ってねー!」

「いや手伝つてやれよつー? まじで真面目にして沙耶つー。」

ドガツ！

スライムは倒れたつ！もしくは死んだつ！！

一三九

「……ホイリツ！」

ホワーリング

「ありかとでかす兄貴っ！」

ヤンガヌ!!! たたみかけるぞ!!!」

作戦 ガンガン殺ろうぜ

「アーティストのアート」

沙耶が最後の一匹を倒した。つてか苦戦しそうだ。

タラリラリッタツターーン！（ レベルアップの時の音のつまづ）
沙耶はレベルが上がった！！

「おまえ、さあ戦つよ。」

馬車に乗つてたトロテか言つた。
あんたは見てるだけだろーか。

でせうれじゅあトドケヌといふか、洞窟も行けをうになしな……

卷之三

「そりだよ。焦らすむつがいいと細ひよ。」

卷之三

ヤンガスと沙耶は見事にハモッた。

エイトさん
それ鬼すぎ

なんだかんだでレベルが上がった。（もちろんレベル10じゃないけど）

「よおーしつ！ いざ、ダンジョンコレッシング！」

「……はあ、はあ……。あ、あのヒイトさん？」

「あ、兄貴い…。一回町に戻つて休憩しやせんか……？」

「人とも、はあはあ言つてゐる。

いやヤンガスがはあはあ言つのは非常に気持ちが悪いのだが。

「うーん… そうだなあ……。形勢も整えた方がいいし帰ろうつかつヒイトさんがテンションすごいのはレベルがいっぱい上がったかららしい。

沙耶にはそのレベルが上がる喜びがとても分かる。

ああ、分かるとも……（遠い目）

そしてヒイト達はトラペッタの宿屋に泊まつた。

タラリラリタツティーネン（宿屋に泊まる時の音）といふがこれ？）

「あ……ヒイトさん！」

宿屋から出るとかわいい女の子がヒイトを呼んだ。

「あ、ココマさん。」

「…………？」

「ええーっと……」

一瞬どきつとした。

もしかしたらエイトの彼女……？

「彼女が水晶玉を探してくれと言つた本人だよ。」

「あ、そりなんだ！私沙耶。エイト達の旅についていくことになつたのー！」

「そりなんですか。私、コリマつていいます。探してもらいたいのが父の水晶玉なんです。」

二人は楽しそうに話している。

ヤンガスが空氣のようだ……。

「それじゃあ俺達は行きますんで。待つててくださいね！」

にこつて笑うエイト。コリマちゃんは顔が赤くなっている……。

この子もしかしてエイトのことが……？

「が、頑張つてください。エイトさんつ 沙耶さんもつ！
あ、ヤンガス忘れられてる……。」

ヤンガスの泣く頃に（後書き）

えーヤンガス大好きな方。
誠に申し訳ございませんっ！！
いろいろと扱いひどいですはい。
一応作者もヤンガス好きですよ一応。

コレタンジニアへーー（前書き）

今更ですがこの小説はネタバレ全開です。
裏ボスまで出すつもりですからね……。
まだドラクエクリアしてないっ！といつ方は今すぐ戻るを連打しよ
う
やつてやんよー！といつ方はぜひ見てあげてー！

ニャタンジヨンくーー

待ちにまつたダンジョンー

沙耶の気持ちは嬉しむで一杯である。

そもそも地球人がゲームの世界を体験する時点で嬉しい。もー、このまま戻らなくてもいいのかな?と思いやえした。(でも戻らないとあれかな.....?)

やうこえば、向こうの世界はどうなつているだらうか。

時間は進んでこるのだらうか、それなら私は今行方不明かな?お母さん心配するかなあ.....。

『あー? めんどいからもういくんの草でも食べとこたらあ?/?』

過去にやつぱられたことがある」とから、それはないなと思った。あのとき6歳の私にそれは酷すぎるよお母さん.....。
そういうえばよく、お母さんに似てこむと言われる。なんでだらう?

「せりせり、ほーっとしてると魔物にやられぬよ。」

(ヒヤドミたいなお母さんだったら嬉しこのにな.....。)

「何気に失礼な事考えるなつーせめてお父さんだらー?」「

「おおひつー?読みとられたあー?」

「嬢ちゃんの思つてることは何となく分かるでやんすよ.....
かじこむの底にヤンガスまでつー?」

「よし洞窟についたよ。」

「うー.....そんなに分かりやすい性格なんだ私.....。」

いつまでも沙耶はウジウジしている。

よつぽビショックのようだ。

「はあー……、いつまでもウジウジしないつーもう洞窟だよーーー。」

「う、うん。」めんなさいお母さん……。」「

「いやお母さんじやないし。ナチュラルに間違えるなよ。」

「は、はいおか…「ギロツ…」……エイト様あー。」

「それでよし。」

……「えーよエイト様。

「兄貴……洞窟の中は真っ暗でやんすよ。これじゃあ進めないでがす。」

ヤンガスの言う通り、洞窟は真っ暗で足元も見えないほどだった。これでは進むに進めない。

「困ったなあ……。なにか火が付く棒みたいな物があれば……。」

「

3人は悩んだ。

洞窟なんで木のようなものもない。

戻ったとしても、草ばかりで木もなかつたはず。

「あ、ここにいい棒があったよー。これならちょうどいい長さだし
つーーー！」

「あーいいねそれ、早速火を付けよーーー！」

「あれ、それってどこにあつたんがすか？」

「なんか背中についてたんだー！私ってばラッキーガールつ

沙耶がラッキーガールなのかは置いといで……

「よしつ、トーポの出番だつーーー！」

そう言つてエイトはねずみを取り出し（！？）手のひらに乗せた。

「ね、ねずみっ！？」

「うん。」こいつはトーپって言つて、いつもポケットに入れてるんだー。」

沙耶はトーپとやらに手を向けた。

かわいらしい仕草をしている……。これはもつ、ねずみと言ひよりハムスターではないのか？？

「それでそのトーپをどうするの？」

まさかこの小さな手で摩擦を起こして……いや無理だ。そんな事を考える作者がおかしい。

作者「うるせえーなあ……。」

「今まで言つてなかつたけど、実はトーپにチーズをあげると火を吐くんだ。」

「はいっ？ 火い？？」

何を言つているんだこの人は。

「嘘じやない。ちょっと見てて……。」

エイトはトーپにチーズをあげた。トーپはチーズをおいしそうに食べている。

「なんだ何も起こらない

」

ボウフー！

「…………え？」

棒に火が付いている。

只今沙耶の目が点になりましたーぱぱぱぱー。

「ええええーっ！？ 火吐いてるーー？？」

「あはは。えさあげるときも火吐くから大変なんだよー。あははじゃねーよとんでもないもん飼つてんじゃねえーよ。

「まあこれで火ついたし。進もうか。」

トーポはポケットにまた戻つた……と思つたらひょっこり顔を出した。
かわいいのにこわい！

「あ、兄貴、魔物でがすー！」

ドラキーだ！

「よおおーしつー！ 殺るぞーーー！」

……そこ、漢字じゃないです。やるが殺るになつてます沙耶さん。

「……あれ、沙耶。槍は…………！？」

「何言つてゐのヒトアツ？ ヒトアムジヤ。」

……無い。

「あ、―――っ！？ や、槍があああああつーーー？？」

「と、とにかく今は攻撃しろつー！ 殺られるぞつーー！」

だからそこ漢字じゃないつて。どんだけこのパーティー怖い発想してんだよ。

「倒したでがすつ！」

「ナイスヤンガス！ー！」

エイトももう一匹倒して一件落着ーー！

「で。槍はどうしたの？」

「置いてきたんでがすか？」

「ううん。だつてここに来るまでも戦つてたじやん。」

せつかく買つてもらえたのに……。

沙耶は泣き声になりながらも持ち物をもつ一度調べた。

……やっぱ、ない。

「「めんね……ハイト。」

「謝ることないさ。槍なんて無くしても、もつ一度買いなおせばいいんだから。俺だって間違えて無くした」とあつたし。

「そうでやんすよ。それに入つたばつかだから兄貴のルーラで戻れるでがす。」

「でもどこに無くしたんだう……あんな大きい物。」

「うん確かに……。ちょうどこのたいまつくらいの大きさだよね。」

「うん。たいまつくらいの……。」

たこまつ……へらいの??

「もしかして……」

「ああ。まさかだけビ……」

「「燃やしちゃつた?/?」」「

「あーーあの時渡したのがあーー
いや。どんだけあほなんだよ私。

「ま、一回町に戻ろうよ。ルーラで。
「うん。…………ありがとうー。」

コレタンジョンくん（後書き）

みなさん、大切な物を燃やしてしまった事はありますか？
いや普通ないかww

「モダンジョーンヘー！」パート2

つと以此ことで仕切りなおし。

今度はやくそなども買っておいたので準備抜群だ。

「（今度こそ）レッシラゴー！」

ちゃんとたいまつも用意したし槍も買った。（予備に2個）
この時点で私たちはやばいほどレベルが上がっているんでガンガン進んだ。

これならボスもらくちんだと思つ！

「あ、エイト。あそこにモンスターが待ち構えているよ！」

「じゃあ武器は出したままにしておいて。俺が話しかけるからその間に、一人は後ろからボロンとやつちやつて。「いや卑怯すぎるだろ……」。

「〇ケー。いくよヤンガスー。」

二人もちょっとは遠慮という言葉を知らんのか。

「え、何ー？ 遠慮つておいしいのぉ？？」

「あ……。

「やあ君。悪いことはしないから通してくれないかな？」

エイトが話しかけたモンスターはおおきづちだつた。

大きなハンマーを持ち、毛皮のような物を被つてゐる。

ちなみに作者が一番好きなモンスター。

「通すもんかー！ここはおいらたちの住処だいー！ 仲間を売るよう
なまねなんてー！ー！」

二人はおおきづちの背後に回り武器を振り下ろそうとした。

「せひ売ってくれる?」

卷之三

「ほつ」。

（アーチー）ハエタニタス？出で、撒キ。

洪武元年正月

「だけどあつしは仲間を売るまねはいけないと思うでがす……！」
「おつ、ヤンガスいいこと言うねえー！ そういう事ならぜひ手伝

卷之二

二三九

「迷ってるのせよくなーよ?」

「ナイスエイト！！」

卷之三

! !

その後毛皮をとられたおおきづちがいたとかいないとか

いわゆる、齋田である。

怖い。一言でこうと怖い。

「一言でいうと悪魔すぎるパーティ。つまり死のパーティ……………！」

「さあもつすぐ、ボスと思つよつ……。」

それらしき部屋についた。

もちろん私たちは商売繁盛（魔物狩り）で死を恐れないつ！
もしもの時はトローデ王様がひの木の棒で駆けつけてくれるよつ……！
トローデ「いや、無理。」

「あ、エイトあそこに水晶玉がある……。」

「本當だ……なんであんなとこに？？」

そう。水晶玉は野ざらしにされていた。あからさまに黒っぽい。

「なーんだ！ ボスもいないじゃん！！ よーかつた。」

なんて沙耶は水晶玉を手に取つた！！

「さ、沙耶っ！？」

「ザツバ
ン……わし、誕生……！」

「誰あの人？」

「さあ……。
……はいい？」

「人つていうか、モンスターじゃないんがすか？」

「わしはザバン。ここでのんきに寝てたらこの水晶玉が頭にぶつか
り。思い出すと腹が立つわい……。持ち主は必ず戻つて来ると
思つてたんじや！ 復讐してやるわい……。」

「わ、私たちは持ち主なんかじゃないよ！？」

「いや沙耶。ここは持ち主だと黙つといて、戦おひー・ビハセヒ

しなきや無理だろうしね。」

「血が騒ぐでやんす！…

二人はやる気だ。

私は正直……めんどくさいです。

ザバンがあらわれた！

「食らえつ！ わしの十八番！！
呪いがエイトに降りかかるつ！！」

「エイトっー！」

「わあつ！？」

しかし打ち消された！

「……えつ？」

ザバンも驚いている。

「よしつ、今だ！！」

私の攻撃が初、クリティカル！！
あーすつげえ気持ちいいー！

「ええつと……。沙耶は攻撃。ヤンガスは腐るまでテンション上げ
て！！」

「分かつた！」

「……腐るまで……でやんすか……。」

「ぐう、なかなかやりあるのぉー！ だがこれならどうだー！」

今度は沙耶に呪いをかけた！

……わざああるー!?

全く動けなし。

「少耶！」

「兄貴！」

いつの間にかヤンガスはテンションがたまり、スーパーハイテンシ

三
ン
と
な
つ
た

ドランクエスでは「マンド」新たに『ためる』が追加されていく。
つまりためることでテンションは上がり、スーパーハイテンション
に！

そのまま攻撃すれば、相手は撃沈すること間違いなしつ！！

ヤンガスの一撃が見事にヒット！！

ザバンはたおれた！

「やつたでやんす！…」

「沙耶、大丈夫？」

「え、ああうん。もう平氣。」

ザバンは頭を抱えている。

古傷のようだ。

「いたたた……お主ら、持ち主じゃないな？」

「さつきからそつ言つてんじやん……。」

「とにかく、水晶玉は返してもいいよ。取つてくれつて言われているんだ。」

「やうか……、ならやうつて一回もつてしまひ。」

『ごみは捨てるなあああああああああつーーーーー』

あまりにザバンの迫力に沙耶は思わず尻込みをした。

傷痛まないんかな？

とにかく、水晶玉は取り返せた。

ニモタンジョンへ！！パート2（後書き）

おおきづちの毛皮無じバージョンが見たい。

「意見・感想お待ちしてまーすっ！
お気軽にどーぞ！！

占いは当たる確立20%（前書き）

「ザブキヤラ紹介」

ユリマ 占い師ルイネロの娘。しかし血は繋がっていない。

多分エイトにべた惚れ。

ルイネロ ボンバー・ヘッド

占いは当たる確立20%

私達は今、トラペッタにいる。

占い師の娘、コリマちゃんに水晶玉を返すためだ。

「たしかここだったと思つ。」

エイトが指した場所は地味なところ、つまり目立たない場所だ。

「こんな所にドアがある……。」

隠れ家みたいな家だと沙耶は感じた。

普通なら気づくのは時間の問題だと思つ。

私達はそこへと入った。

「エイトさん……！ 沙耶さん……えっと……や、ヤンガスさん？」

よく思い出したなえらい。

「……胸が痛いでやんす。」

「約束の水晶玉、取つてきたよ。」

エイトは水晶玉をコリマに差し出した。

その時。

「うーーーー 帰つたぞおおーーーー！」

「お、お父さん！？」

いかにも酔っ払っている人が来た。

この人がコリマの父親、もとい占い師のルイネロさんらしい。

なんというボンバーヘッド……！

「ん、なんじやい！ そいつらは誰だコリマ？」

「えつ……と……。」

「お父さんの水晶玉を取りに行つてくれた人たちだよー。」これでお父さんも占い師に。

「今すぐ捨てるーー わしにはもう二らないと決めたんじやあああっ！」

そう言つとルイネロさんはコリマが大事に持つていた水晶玉を取り上げた。

「こんなもの…………」

「お父さん！？ やめてーー！」

「そうですよルイネロさん！ 彼女は貴方のことを思つて俺らに依頼したんですーー！」

エイトはルイネロから水晶玉を取るひとした。

沙耶とヤンガスはつて？ ただ唾然と見ていたとさ

「ぐぬぬぬぬつ……は、放せえい…………。」

「は、放すもんかああ……。」

二人とも一生懸命水晶玉を取ろうとしている。

「…………えいっ！」

バシッー！

水晶玉が無くなつたと思つたら、既に沙耶が奪つていた。

「いっえーいっ！ 水晶玉ゲツチュー！」

沙耶は嬉しそうに水晶玉を抱き、そしてルイネロに見せびらかした。

「ほれほれえーいっ、悔しい？ 悔しい？ 今どんな気持ち？？」

「ぐくぬおおおおう…………！」

「さ、沙耶さん……。」

「ゆるさんつ…………。」

「くつへーんっ！　」こいつを返してほしければいつと置きなつ！」

！」

「沙耶……。誘拐じやないんだから……、はああー。」

「がーん、失望されたつー？」

「当たり前でがす。」

すらりとつっこむなばか。

「お前、わしをばかにしてこるのか？　」うなつたら力ずくでも水晶玉を壊してやる……！」

ルイネロさんの堪忍袋の緒が切れたつー！
と、思ったその時。

「お父さんつー……いい加減にしてー……」

残念。娘の方でしたあー。

これには皆びっくりした。

「ゴ、ゴコマ……ー？」

「お父さんおかしいよー！　私は占いの当たらなーお父さんなんて嫌いつー……」

ガーン……

ルイネロは鉄砲玉食らつた鳩みみたいな顔をした。

面白いなー。

「私は……お父さんと血が繋がつてなくとも……ちやんとした、占い師の娘だよー！」

「ゴリマ……ー！　お前、わしの子じゃないと知つてたのか……。
なんという急な展開だ。

まさか血の繋がらない親子とは……。

イイハナシダナーとか言つてる場合じやないよこりやあ。

「私の両親はなぜか死んじやつて、お父さんが代わりに育してくれたんでしょ……？　お父さんは両親が死んだのは自分の占いのせいだつて思つてゐたわけだけど私はそつは思わないよー……」

「ゴリマ……。」

「それに……私はお父さんの自信に溢れた凄い占いを見たいしね!」「ゴリマあ……! わしが悪かった……。わしは……わしは……。」

…。」

なんだわ!。

とても屈づらい空気は……。

「なんか屈づらいでがす……。」

ヤンガスも同じようだ。

エイトは今の話に感動しているみたいで涙を流しそうにして立てる。

「旅の者……。悪かつた。これからは前向きに立ち歸とじんやわ! ！」

「あ、じゃあ占つてもらえますか?」

「おう! なんじゃなんじゃ??」

ルイネ口は偽の水晶玉をどかして持つてきた水晶玉を机に置いた。

「人探しなんですか……。ドルマゲスって分かります?」

「人探しなら得意分野じゃよ。んつ? ドルマゲスってライラスの弟子じやなかつたか??」

エイトに話してもらったライラスとはドルマゲスの師匠らしく、旅に出たとき探し回った人らしい。

どうやら火事で死んだと言つてた。

「はー。今、あいつを探してます。」

「よし……任せろ。 むむつ! -?」

「分かりましたかつ! -?」

沙耶は占つとかしたことないから、とても興味津々でビリするのか楽しみなのだが。

水晶玉意味ないような気がする……。
だって見てないじゃん。

「これは……塔か。たしかこれはリーザスの……。」ここに奴は居る

「違ひなーーー！」

「どうあるハイテーーー！」

「とにかく行こうよ。なにか分かると頼りだ。」

「あつしは休みたいでがす。」

「いやもひゅ回へりこ休んだじやんか。」

「それではルイネロやれど。あつがひとりやれこめました。」

私が部屋を出ようとしたその時　。

「お井。」の世界の者でなーいな？」

「えつー。」

占いは当たる確立20%（後書き）

やつとトラペツタ編終わりですかねー。
次はツインテールのあの人気が登場するかもかもっ！！

暴力反対（前書き）

こんな私に感想を送ってくださるブリーノ・ラハールさん、広地 久さん。

本当にありがとうございます！

暴力反対

正直、甘く見ていた。

まさかゲームの世界の占い師が私のことを占うるとは……！
「ま、まああつてるんですけどね。」

「やはりな。」

「えつ……ええつ！？ 沙耶さんが違う世界のつて……ええつ！
？」

「おっちゃん。沙耶嬢ちゃんの事、なんでわかるんでやすか？」

「長年占いをしてたらわかるもんじやよ。この世界とは違う、オーラみたいなものがな。」

ルイネロさん……。それはもう占いじゃなくてエスペーでは？

「つじ」とは沙耶の元の世界に戻る方法もわかるのでは？

エイトが尋ねた。

確かに、そうかもしれない。

でも、元の世界に戻るのはまだちょっと……。

もづけよつと居たい気がする。

「残念だが、そこまではわからん。とにかく、足を止めてわるかつたな。」

なんか占いつて理不尽だよね？大事なところがわからないし。
まあでも助かつたかも？
エイトともいたいしねつ！！

んつ？

なんでそこ、エイトなの！？

いやいやもつと魔物を見たいとか、魔王も見たいとか、キラーパン

サーが見たいとか……！」

「それはねえだろ……！」

「えつ……沙耶じうしたの……？」

「はつ。こ“え”いえ……やましこ」となんて何も考へておひながね……。」

「怪しからぬでがす。」

「ひ、ひむといなーヤンガス！ 肉団子にするんや……。」

ギャ//ギャ//ギャ//ギャ//ギャ//。あー、ひむれこ。

「じゃ、じゃあ私達は行くんで。色々とお申話になつましたー！」

一応礼をして、急いで外を出た。

「お腹空いたなー。」

「もうこや、あつしら全然食べてないでがすね。」

「一人とも、何言つてんだよ……。つこわづか食べたじやん。」

「あれ、わづだっけ？」

「そうこや、食べた氣もするでがすね。」

「そんなことより、陸トに報告するやー。」

「「“えー”。」

「「“えー”。」

せんとくにハートのひとをぬきといて、(じつじ)

「ほお……。次はリーザスの村か。」「たしかにこれから左の方ですよね？」

私は左を見た。

「そつちは右でがすよ。」

「…………。」

今度こそ、左を見た。

「いやトラペッタの門見てビーすんだよ……。」

「えつとー……。どっちだっけ?」

「茶碗持つ方だよ。ってかその頭はヤンガス以下だぞ……。」

「あはは……。」

「あつしと比べないでほしいでがす。」

「それはこつちのセリフだわ。かしこせうと比べられたくなーよ。かしこせうとは、本当である。」

「二人ともー。置いてくぞー。」

エイト達はもう先に歩いてた。

「いつの間にこつ！ ちょ待つてよー！ー！」

「ううう……。人が気にしてるのに、ひどいでがす……。」

あ、気にしてるんだ。

意外とリーザスの村はトラペッタから近くで、すぐに着いた。しかし周辺のモンスターが強く、早く泊まりたい気分だ。

「わーつ！ 空気がいいのー。」

言っちゃ悪いけどそこは田舎だった。

ちなみに私が田舎だと決めるのは「コンビニがあるかどうか。……」この世界にコンビニなんて無いじゃん。

改めてこの世界の不便差を知った。

でもこの世界の店なんてほとんど24時間営業の多いねー。

そつやつて宿屋に行こうとするとい、

二人の子供がいた。

いやべつに珍しくはないが、子供は私達に向けて銅のつるぎを構えている。

もう片方は鍋をかぶつている。可愛いなw

「わわっ！？ 危なっ！！」
「やい！ お前、見ない奴だな！ ぐははは……！」

子供は私に向けて剣を振舞つてきた。

ガキンツ！ガキンツ！！

「五ノ葉」一八

「日頃の罰でがす。」

二

「二人ともひとこ !?」

しかしエイトとヤンガスにも攻撃が入った！！
ってかこの子供とエイトの武器一緒じゃん。

「うわっ 危ねーな！」

「やめろ！」そのイカイガ帽子となるなでかす！……」

疲れて宿屋に行きたいたってのに……！

「よしマルケッ！ 一人で攻撃だー！！」

マルクと叫はれた少年は被さっていた鎧で周りを攻撃し

た。

うてか鉢のへるきて人も憲せるので
知二てた?

「やめんかつ！！！
ポルク、マルク！！！」

「ひつ！？」

誰かが止めくれた。親だろうか？

「お前らはほんま……！　いらつ」としげやのぉ――！」

ああ……。まさかの関西弁おばちゃんですか。
ドラクHにも関西弁があるわけねーだろ。

「すんませんほんまねー。」

「い、いえ。全然大丈夫ですよ。」

正直、関西弁のおばちゃんが怖い。

「この……。ばかほんがつ――！」

ポカッ！

おばちゃんは子供達の頭を殴つた。じゃなくて叩いたか。
子供達は頭を抱えてその場に崩れた。

「痛つてえ――。おやじにもなぐられたことないの！」

「うわーんつ――」

なんかガソノム的なこと言つてゐし。片方泣いたし。

「最近、殺人があつたんよ。アルバート家の子がなあ……。」

「それでですか……。」

だから子供達はよそ者を襲つたらしい。

「はた迷惑な話でがすなあ――。」

「ほんまといません。おわびといつちやなんやが、泊つていかへん
か？」

迷わず、私達は泊らせてもりつた。

ふふふつ……―これでお金節約できるぜ……。

タラリラリタツ テイーンー(ヒツヒツ。)
次の朝が来た。

「ほんで、ビーハベヘンヤHイト？

「ああうん……って口調おかしくなつてない沙耶？」

「あ、ほんまやーー?」

思わずおばちゃんのがうつてしまつた。

訂正訂正……つと。

「で。どに行くの?」

「えつ……つと。アルバートさんやに向いに行ひひと思ひで。なんか知つてるかもしないしね。」

「結構豪邸でやんすね……。緊張するだがす。」

「確かに……。」

そう。結構な豪邸だつたのだ。

H-イトはうつこのの慣れてそつだナビ……

「おじやまします。」

「お、おじやましちゃこまーす……。」

「ねじやますんでやんす……。」

ドラクHのやばい所は人の家に勝手に上がれるとこ「」ことだと思ひ。そして人の物を壊すところ……。

「ねじあつーー!」

パリーンシーー!

「H、H-イトやーー。」

「沙耶嬢ちゃんもするでがすよ。」

ガシャーンシーー!

「わ、私は遠慮しとくよ……。」

『キヤ

ツ……?』

その悲鳴は突然、この家中に響いた。

「げ。ばれたかな？」

「とりあえず行くでがす。」

「わ、私は何もしてないもん……！」

私達は悲鳴の聞こえた方へと、走った。

暴力反対（後書き）

ゼシカさん出ませんでした。
期待してた方ー申し訳ございませんっ！
次こそ（多分）出すよっー！

ゼシカがいない（前書き）

サブキャラ紹介

ポルク 銅のつるぎを持った大人びた子供。言葉より先に動くタイプ

マルク おにやべ（お鍋……って書かないと分からなによ）

ゼシカがいない

『…………ツ！？』

その悲鳴は誰でも震わすことのできる悲鳴だ。

「あれ、前回と違つてないセリフ？」

作者「めんどいんだ、いいだろ。」

「とりあえず、行つてみるでがす」

悲鳴が聞こえた部屋についた。

たるや壺などが多いから物置場……かな。

そこには小さなメイドが一人、突つ立つてている。

「どうしたんですか？」

メイドはもう泣きそうになつていた。

「お、奥様にこここの部屋のそうじを頼まれたのですが……。」

「ちゅーつ。」

「キャアアアアアッ！」

「…………なるほど。」

「ねずみかあー。」

怖がつたのか、ねずみは穴の奥へと逃げた。

「ああっ！？　お隣はゼシカお嬢様の部屋…………！」

「どうする、エイト？」

「うーん。確か、こここの部屋つてポルクとマルクが邪魔で入れなか

つたんだよね。」

ポルクとマルクに、

『「こ」は姉ちゃんの部屋だ！ 勝手に入る事は許されていないぞ！』

！』

つてなかんじで追い出されたんだっけ。

「兄貴。ここにねずみが通れるくらいの穴がありやす。」

「うん。知ってるよ。」

いらっしゃらない？ エイトさん。

「あ、そーだ。トーゴを潜らせたらどうかな？ なんかあるかも。」

「それいいね。さつそくしてみようか。」

トーゴはエイトのポケットから降りてそのまま、穴に入った。

「何か見つかるといいんだけど……」

（15分後）

「あ、トーゴがなんか持ってきたよ！』

手紙のようなものを持つて帰ったトーゴは、一仕事を終えてまたポケットに入った。

「なんだろう……。」

ちょプライバシーが……。勝手に見ていいの？？

『私は兄さんの敵を討つまで戻りません。

自分の信じた道をいきます。

お母さん、ごめんなさい。

そしてポルク、マルク。騙してごめんね。

ゼシカ

「これって……一大事じやあ…………。」

「あ……ああ。とにかく確認しようつい……。」

タタタタッ！！

ゼシカの部屋の前についた。

「おい、お前らまだ諦めてねーのか。何回も言つが、いいは……」

「そんなことより！ これ見てよポルクう！！」

「な、なれ慣れしく呼ぶなよ！」

「なんだこれ？」

ポルクは一文字ずつ、ゆっくりと手紙を読みあげた。

最後の方はなんかふるふるしてたけど。

「たたた、たいへんだあー！！！」

「ポルク。姉ちゃんの部屋を確認しよーよー。」

ガチャ！

「…………い、居ない。」

「窓が開いてるから窓から出たんだね…………。」

「どうすれば……。そうだ……」

「ふえ？」

ポルクは沙耶の前に駆け寄り、頭を下げた。

「わわっ、そこまでしなくても…………。」

いくらなんでも、じどもに頭を下げられたらね…………。

「たのむっ！ あんたらの力を貸してくれ！！！」

「よし分かつた！」

「はやつ！？」

「人助けは気持ちいいもんがす。」

「あんたは前まで盗人だつたでしょーが。」

「よ、よかつた！ なら今からついてきてくれ！ 塔まで案内しよう

!

え、
今？

「マルクはこのことを見んに知らせるんだー！」

今が命にチャカカ……とね……

卷之三

「ばかっー。姉ちゃんがいなくなつたらどうするんだよーー!」

わしやたちが死んだらどうしてくれんだよ。

卷之三

「おなかくつたなー。」

あつしは休みたいでがす。

「二、三、四、ト、ジ、ト、ダ、ダ、
」
さ、ジ、ミ、一、か、レ、ハ、
ア、

緊張感の『き』もないパーティだな。まあいいか。

なんだかんだで塔の前についた。 つてかポルクつて戦闘参加しないのかよ。

ハガキ一
「

「あかないでがすよ？」

うそー?
あ、ほんとだ。

「おはようございます」と、おじいちゃんが笑顔で挨拶をした。

「おじいちゃん、おも馴なじみですか？」

ガラガラガラ……

なんとドアが開いた！

セキリティー弱いから盗賊とか入るんだよ。

「な、なぜ……！？」

「あんましょくないと思つよこのドア。」

「うんうん。ヤンガスみたいなばかならともかく、私でも開けれた
し。」

「な、この数年間一度も部外者に開けられたことがないこのドアが
……！？」

当の本人はとつてもショックな様子だった。

いや、ヤンガスもショック受けてた。

「ど、とにかく俺はここまでだかんな！ 後は頼んだ！！」

ピュー。

ささりとポルクは逃げるよう（完璧逃げた）走つていった。
あ、止けた。

「じゃ、行こうか。」

2回目のダンジョン。私達はゆっくりと階段を登つていった。

ゼシカがいない（後書き）

今度は近いうちにドラクエ主人公全員出る小説書きたいなーと思つてます。

もちろん、沙耶ちゃんも出る予定ですよーーー！

ダンジョンは遊びじゃない！

2回目（3回目）のダンジョン。

今度のダンジョンは広い。皆、迷ってしまう「そうだ。

「ここには鍵が掛かってるな……。」

「遠周りするしかないみたいだね。」

敵もなかなか強く、いきなり沙耶達は苦戦していた。

「やつと中に入れたかな。」

「中も広いなー。」

中は薄気味悪く、外と同様。仕掛けも多かった。

こんな所をゼシカは一人で行つたとなると、凄いと思つ。

……ゼシカってやっぱり、パッケージにもいた女の子かな？

もしかすると仲間になるかもしれない。そうなつたら女の子増えて嬉しいかも。

「沙耶嬢ちゃん。どうしたでがすか？」

「え？ いや一次の敵の対策をと……。あはは。」

「別に考えてないでしょ？ ほらさつと行こう。」

「へーい。」

たわいもない、緊張感もない会話をしながらまたひとつ、階段を登つた。

にしても、長いな……。

「なんだこれ。行き止まりか？」

目の前はただ壁。

でも今の所全部行つてるので行き止まりところはず無いは

す。

「あー疲れた。ちょっと休憩。」

沙耶はその壁にもたれた。

が。

「いてつ！？」

「沙耶つ！？」

バタンシッ！！

沙耶が壁をさわった途端。急に壁は回った。

思わず立とうとするも巻き込まれ、エイト達とは反対側に止まつた。

「なるほど。こいつなつてゐるのか……。」

エイトも壁をさわった。

すると同じく壁は回り、沙耶と同じように止つけた。

沙耶はとこうと……

「いたたたたつ……！　あの壁壊れてんじゃないのかああーーー！」

「ん。その様子、じや元氣だな。じや行こつか

「ひどつ！　見る気のかよつ！－！」

とりあえず元氣だ。

「全くひどいなーあの壁。回るなんて聞いてないよ。」

「ちょっとむかつくでがすね……。この塔を作つた奴の顔を見てみたい。」

「おや、ヤンガス君。ほりいさんに文句かな？　私が許さないよ？」

？」

「だ、誰でがすかほりいって……

なんと。君たちを作つた匠（堀井様）も知らないとは。

「二人とも。ここダンジョンなんだからあんまり喋つちやダメだつて。魔物が気づくだろ？」

「はーい。」

「

(ヤンガスが悪いんだ……ヤンガスが。

(あっしは何もしてないでがすよー!? ひどいでがすつ! 嬢ちゃん

のせいでがすよー！）

「はい、人とも聞こえますから。罪のなすりあいすんな
ほんつとこのパーティは……。遠足かつづーの。

しかも幼稚園レベル。

「…………」

ひい

ちなみにこの小説のナレーションは作者でござ
知つてた?

「だーっから、騒ぐなあああーーー。」

「ひう！」

ハイトが一躍した。

「ほら、まゆのくび、モニシングルーラー

「アーティストの見方」

「なんか言つたか？」

「いえなんでも、アザーじゃあせぬ。」

早く戦えよ……

「いっちょかんりよーつと。」

「つかれたー。まだこのダンジョン終わらないのおー？」

「もうすぐじゃないでがすか？」
多分。

ヤンガスの言つとおり、実はもうすぐだつた。

「今日は終わるうか。」M Pも切れてきたしね。」「

え、ちよもうすぐだよ？

「さんせーいつ！ 宿屋にレツツゴー」

ほんとにいいの？後悔するよ？イベント見よ？

「なれどナレジ……」が言つてゐるにと無視しようが

てめーら後悔しても知らなしからなああああ

つてなわけでイベント前にして沙耶一行は今日も休んだ。
「うーんむにゃむにゃ……。スライムが一匹……一匹……二匹……
口テモ一匹……。」

その思いを胸に刻んで（前書き）

ちょっと残酷描写発見。

ああー後悔したよ、最初からR-15にすればよかつたかもしけない。

その思いを胸に刻んで

ダンジョンに再び来た。前回も言つたが、イベント前で一度帰つた。
しかも村に戻つたら戻つたで、戻つてくんなり！とポルクに怒られ
たりもした。

「だからあつしは言つたじやないでがすかー。」

「もうちょっと大きい声で言えつ！！」

だってヤンガスの事なんて誰も信じないもん！！（ひどい）

「とにかく、ここまで来れたんだからいいでよう！？ 行きやしょ

う！」

「ヤンガス今日晩御飯無しな。」

「ええつ！？」

「ここが最上階？」

「……誰？」

ツインテールのお嬢様風の子が像の前にいる。

「もしかして……君が……？」

「よつやく來たわね……ここのは盗人！？」

「え、…………ええーっ！？？」

突然、ツインテの子がエイトに向かって『メラ』を出した！
「ちょ危ないつて！ ガチで火傷するからやめてくれつ！！」
「くつ……、さすが盗人というだけはあるわね。えいつ！…」
「ぎやあああああーつ！？ 私の方にも来たあああああつ…」
「あつしが焼き鳥になるー！」

「ちょこかまと逃げて……くらいなさいつ…」
「だから違うつて！ 僕達は君を探しに…」

「問答無用つ…！」

ツインテの子のメラがどんどんと大きくなる…。

「メ、メラミかつー？」

「いいえ……メラよ……」

なんかこのセリフ、聞いたことがあるよつた気がする。

「いつけー！ サーベルト兄さんの仇ー！」
危ないつ！

やめろ ゼシカつ…！

「こ、兄さん……！？」

その声は沙耶達にも聞こえた。それはリーザスの像からだ。

やめるんだつ
ゼシカ。 その方達は俺を殺した奴
じゃない……。

「や、やめる言われたって、メラは止まらないわよつ

ボシュツー！

「わーっ！」

なんとかゼシカがメラをコントロールし、当たり前に済んだがメラ
は像に当たってしまった。

「兄さんっ！？」

ゼシカが像の前へと駆けた。

俺は今、リーザスの像を借りて話している。

だが時間

は少ない……。

「兄さんは……一体誰に……ー？」

あれは俺が、この塔の見回りに行つたときだ。

いつもどおり、サーベルトは塔の見回りに行つてている。
村の者は平氣だと言つてゐるのだが、なかなかこれは欠かせずほぼ
日課となつていた。

「む。今日も平和みたいだな。」

最上階まで行き、像を拝んだ。

「これから先も、ずっと平和でありますように。」

帰ろうか。

振り向いた途端、異様に感じた。

人の、気配……！

「誰だつ！！」

青ざめた顔。

メイク……どううか。顔に模様がある。

「ひつひつひ……。」

なんと氣味の悪い笑いどううか。
そのときサーべルトは震えていた。

確かに、震えていたんだ。

「貴様……どこから入つたあ……。」

剣を抜いた……はずなのに。

「ぬ、抜かない……だと……。」

一歩、二歩、三歩、四歩。

近付いてくる、あいつ。

「くそつ、くそおお……！ なんでだ……？」

駄目だ。

体がいうことを聞かない。

「お前の……名は……？」

「私がね？ 私はドルマグス……。」

「ドルマグス……だな。貴様の名、一生忘れない。」

「ひひひひ……。私も君の事を忘れないよ。絶対に。」

あこつ……ドルマゲスは俺の前に来た。

ぐさつ……

「ぐはつ！？」

「悲しいなあ…………悲しいなあ…………。もつ君とほんが出来

ないなんて」

「がつあ…………。」

「君の死、絶対に無駄にはしないよ…………。」

「ひーひっひっひー…………！」

何かが俺の体を貫いている。

何かが俺の心を邪魔している……。

母さん、村の娘……………ゼシカ。
すまない…。

「そんな……。そんなの、ひどいよ。」「ドルマゲス……。くそつ、遅かつたか……。」

ゼシカ。本当にすまない。

「に、兄さん……。ひつぐ」

ゼシカは今話を聞き、泣き始めた。
「……………兄さん

旅の方、必ずあいつを見つけては倒してほしい。

あいつの狙いは……俺達、七賢者の子孫だ。

「七賢者」。

「なんなんだそれは？」

もつ 時間みたいだ。

「そんな……。兄さん行かないでっ！――」

じゃあ、頼んだぜ旅の方。 またな、ゼシカ。

「やめて……やめてええっ！――！」

ゼシカは像にすがり込んだ。
しかしあつ何も聞こえない。

「…………。」

「ヒイト、どうするの……？」

「そつとしておいてあげようよ。一人にしてほしいと思つしな。」

「…………。」

出口への階段に向かった。

「…………待つて。」

ゼシカはその場に立ち上がり沙耶たちを止めた。

「あ…………。」

沙耶はなんとなく、声をかけずらかった。

しかしひゼシカは一通りの涙を拭くと、元の顔に戻した。

「疑つてごめんなさい。家に帰つたらなにかお礼でもするから……。
君はもういいのか？」

「もう少し……。一人で居させて。」

「分かつた。」

「大丈夫なんか? 一人で。」

「まあ、本人が言つてるんだ。仕方ないだろ。」

（結構敵も強かつたけど……そうだ、キメラの翼置いておこう。）

沙耶は足元にキメラの翼を置き、エイト達のあとを追つた。

やの思いを胸に刻んで（後書き）

実際にこのイベントをしてみると、泣いてるゼシカに話しかけてヤンガスに怒られて、しぶしぶ帰るのとコレミトしたら使えない歩きかよつと思つて階段に行つたらゼシカに止められると…そういう思いがりますわ。うんない。

カルシウムは大事（前書き）

すっかり忘れていた、王様と姫様の紹介をします。

「ひどい！！（ひひんつ！！）」

トロ^ガテ　トロ^ガテーン城の王様。

誠に残念ですが呪われている。（トロ^ガテロ^ガトロ^ガトロ^ガテッ
テーン）

ミーティア　　トロ^ガテーンの馬……じゃなくて姫様。
こちらも呪われている。（以下省略）

カルシウムは大事

あれから私達はアルバート家に向かつてゐる。その間もしばらく沈黙が続いていた。

- - - - -

二二

はやく村についてほしい。
只すつと願うばかりであった。

「あ、あれゼシカじゃない？」
「ほんとだ。なんかもめてるナビ…。」
つてゆーか私たちの方が先にダンジョン出したのになんでもうひいてる
の？？

「ゼシカ！　あなたはアルバート家の……一人の娘。あなたがこの家から離れることは絶対に許しません。」「だーからっ！　もうこの家とは縁を切るんだってば！！」

「なんかお取り込み中だけど」「あんまし中に入りたくないでがすね。」「えつ、でもお礼してくれるらしいし……。」「もう諦めたり?」
「で、でも……。ぐぬぬ……。」
「なかなか諦められないらしい。」
エイトは超のつくほびノックターだからな……。

「やあ君たち、ゼシカに何の用だい？」

「突然きのこが話しかけて……んつ、きのこへ？」

「き、きのこオー！」

「えつ？！」

「沙耶嬢ちゃん。きのこじゃなくて人間でがすよ。」

「うそだ！ そんなはずがなーい！ー！」

「きのこじゃなくて河童でがすよ。」

「うわあ……僕、悲しいな……。」

「で、どうしましたキノピオ？」

「キノピオじゃない。」

「なんでやんすか河童のクウ。」

「クウでもないから。夏休みないから。」

「二人とも、失礼だよ？」

「おおあなたがたがリーダーですか？ ちやんといこいつらに言ひて

やつて下さいな！」

「絶対、おばけキノコだろ」

「う、うわあああああ――んつ――。」

「なるほどっ！ ドラクエだしおばけキノコがあ……」

「あれ、キノコどうか行つたよ。」

あのー……。あんまし、人の事を言つてあげないほつが……。

ああ駄目だ。全然聞いてないや。作者まいっちゃん。」

「もつ じりないつ…… こんな家出て行つてやるわ……！」

「えええっ ……」「」

そんな事言つてる間にゼシカが怒つたぢやないか。
しかもなぜあんたらが先に驚く。

「ポルクマルク！ ゼロビィてつ……」

「ひつ！？」

なんかポルクマルクって芸人の名前みたいだな。

バタッ！

「ジャジャーンッ！ ビツ？」

「ね、姉ちゃん！？」

扉から出てきたゼシカの格好……それはまさに。

「む、胸が……」

じゃなくて！ パッケージと同じじゃないか！

なんかおかしいと思つてたんだよ。最初メイド服みたいなんだつた
から……。

「じゃ、兄さんの仇取つて帰つてくる。今までありがとう」やこま
したー。」

あっ、ゼシカー。

報酬忘れてません?

「あ、そうだ！！」

お、思い出したか。

「志村動物園録れでおいてねーー！」

違うんかいっ！

つてがあるのかよつ！

「なんか突っ込み所多いよーな気がするんですけど……。

「多分、作者の遊びだから気にしないで？」

「…………あっ、報酬貰つてない…………。」

「ほんとでがすね。」

「つてゆーか、報酬じゃなくて『お礼』だよね？

物かお金かも分からないよね？？

つてハイトさん……？

「追ついだ。」

「「は、はひー」――？」

「ちよ、宿屋にも泊まつてないじやんか！」
「兄貴ー！」はもみじまんじゅうでも食べて、落ち着わせしう

! !

! ! !

カルシウムは大事（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる…。」

「ちょっと、裏話コーナー！…」

作者「てなわけで突然始まりました、裏話コーナー。今日のゲストは沙耶ちゃん！」

沙耶「なんですかこれ？」

作者「まあまあ、すわってすわって！ 個人情報聞きたいんだよ。」

沙耶「言つていいんですかそれ……。」

作者「言わないんだつたら100匹スライム呼んで永遠とバトルしてもらいます。」

沙耶「分かりました！ 喜んで言います！！」

作者「よろしい。では質問。スキルの宝探しって？」

沙耶「ああ。それはヤンガスと似たスキルですね。例えば、宝探しという技があつて世界中の宝の位置と中身がなんとなく分かれます。」

「

作者「なるほど。とまあこんな感じでオリキヤラ沙耶さんに質問したいことがあるという方はぜひ私にお知らせください。多分、答えます」

沙耶「多分で……。」

作者「メッセージでも感想でもいいよー適当でいいんだよー。」

יְהוָה יְהוָה יְהוָה

「まあまあ……。こ、こんな」

やつとついたポルトリング。

しかも私のHPが14くらいになってるんですね」と

か。

「やつとひこたでがすね……」うふふ、せれり。

ヤンガスモK・0寸前

「さあ！ セシカを探そう！！」

なんでこの人は元気なんでしょうか。

「エイト。先に宿屋に泊まろいよ。」

一
え、
でも

「じゃないとハイテの武器全部売るよ！」

ガーンツ！！

エイトは豆を食らつた鬼の顔をした。おにはそとー。

なんかエイトの弱点が分かつた気がした。

「それじゃあ、泊まるつつか！」

「やつたでがすー！」

反省の顔が見えたエイトの顔がまた、輝きだした。

「「」めん。先行つてて！」

「え？」

エイトはそのまま武器屋へと駆けていった。

ホント、武器好きだなー。

「じゃあ、先行つておこひか。」

「やつたー やつと休めるでがすーー！」

「ええーと……。じれとじれとじれつーー もとめでくだせー。」「おお、あんちやん。なかなか田がいにな。そんはこに限[定]だよ。」

「わあーこつぱい並んでるー。」

エイトは武器屋で一時間ほど、商品を見ていた。

「えーとヤンガスの斧と……。あ、鉄の槍！」

よかつたー。沙耶の武器がずっと木だったから、これで安心だ。

「さて、そろそろ帰りますか。」

「まいどありつ！ またよあんちやんー！」

帰る前に、この町のもの全部調べたいな。
ちょつとへりい別にいいだるひじ。

エイトは町の酒場についた。

なにか有力な情報あればいいけど……。

「あのー、すみません。教えてほしいことがあるんですが……。」

「あらお兄さん。今はダンス中よ。待ちきれないのは分かるけど、

少し待つてね。」

.....。

なんとなくここは場違いのよつな気がしてきた。

「んー。なかなか眠たくならないや。」

酒場を出てライトは少し、海の風に当たっていた。

帰らないと。多分、みんな心配してると思ひつな。

帰りながら思ったのだが、沙耶はビーチで自分の世界に戻るのだろうか。

沙耶がこの世界に来た理由はドルマゲスとあの杖に関係あるのかな？
無関係の場合もあるけど.....

沙耶は元の世界に帰りたいのだろうか。
そうなると、寂しいな

勝手な考えだけどまだ居てほしいと思つ。
でも、本人は帰りたいに違ひないだろう。

「.....。」

最近、なんかもやもやする。
なんでだろ。

「た、ただいま~」

そ一つと、まるで会社から遅く帰ってきたお父さんのよつエイト
は部屋に入った。

「.....遅い。」

「.....沙耶まだ寝てなかつたーー！」

ヤンガスは……うん、いびきつねこへりこよく寝てる。

「今何時ですか。」

「えーっと……。お昼の1~2時?」

「ちがうわ! 深夜だよ深夜!」

「へ、へえ。時間経つのつて早いんだね。」

『「まーかーすーなーあー!』』

うわあ、沙耶の考えが小説のよつに読み取れるよ……。

作者「実際、小説ですから。」

「で、なにしてたの?」

イライライライライライライライライ!

「ひ、はいっ! 武器見てましたあ……」

なぜか反射的にエイトは正座した。

「ぜつたい、それだけじやないよね?」

イライライライライライライライ!

「え、は、それはその……。」

「何い? 聞こえない」

さ、沙耶のまわりが……絶対漫画だったら横にイライラつて文字あるよ。

「じめんなさい! 酒場で情報聞いてましたあ……」

ブチッ

「ひ……!?

や、やばい沙耶がある意味スーパーイヤ人になってる!」

「酒場で 情報……だと?」

「すいませんすいません!」

や、やられる……!」

「なんだ、情報聞いてただけなのかー。」

「なんと許してくれた。」

「よ、よかつたー。」

「で、情報は？」

「……………？」

「あれ、聞いてない？ もしかしてそれ嘘なの？？」

「いや、だれも知らなくて…………。」

イライラ略。

「へえー、誰も知らなかつたんだーあ？」

「いや本当だつて！ とにかく、これあげるから許してくれつ！」

鉄の槍を沙耶に渡した。

「あー！ 新しい槍！！」

「実はそれを探すためにずっと探してたんだ。」

「え…………？」

「ごめんなさい、嘘です。」

「すぐ言つのは恥ずかしいからな。まあ、渡せてよかつたよ。」

「神様、沙耶様、ごめんなさい。もっぱら嘘です。」

「あ、ありがと……。」「めんね、強く言つて。」

「うん、いいよ全然。」「ちがい……、心配かけてごめんな。」

「イトさん、最低。」

「う、うるさいなっ！　しかたないだろ？！？」

「どーしたの？」

「え、いやなんでもないよ…………」

「それじゃあ、もう寝るね。」

「あ、ああお休み…………。」

「ぐー。」

「寝るのはやつー。」

いつかのび太を超せるよ

「ぐがああああー。」

「ね、眠れねええーーー！」

翌朝、エイトは寝坊した。

「…ひ、ひやつわですかー。(後書き)

ヒイトさんの意外な性格。

新しい仲間

「さて、ゼシカを探しますか。」

「…………。」

「どうやらエイトは寝不足のようだ。

「沙耶嬢ちゃん。後行つてないのはどういらへんでがすかね?」

「多分、船場だと思うよ! ね、エイト?」

「う、うんそうだね…………。はあー。ねむい」

エイトを無視して私達は船場についた。

するとそこにはゼシカがいた。

いたんだけど…………。

「だーかーらあーーー! 船出してつて言つてんでしょ! うーーー。」

「で、ですがあいにく魔物がいて…………。」

「そんなのあたしがやつつけるわよー!」

「し、しかしアルバート家のお嬢様にそんな…………。」

「察しが悪いわね! あの家とは縁を切つたつて言つてるでしょう!

!?

「(びつする沙耶?)」

「(嫌なことに巻き込まれそつだから前には出ないでおこうよ。)」

「そこそ話をするもゼシカはこちらの存在に気づいてしまった。

「なら、の人達があたしの代わりに倒せばいいわ! それならいいでしょ?」

「えええええつー?」

「たしかに……。それならば…………。」

「ちよ何勝手に決めてるんだよ！ そんなの聞いてないよ……」「そうですがよ！ あつしらはそんなこと関係ないでがす！」

「そーだそーだ！」

「でも貴方達も困るでしょう？ 南の大陸に行かないとドルマゲスも追えないでしょ？」

「うつ……。」

「だから魔物を倒して！ お願い……！」

「そ、それは確かに正論だな……。」

「それではっ、しゅぱーつ進行ーーー！」

つてなわけで私達は魔物を倒すため、航海の旅へと出た。

「これはっー？」

頭に急に浮かんできたのはドラクエおなじみの『序章』！

このタイミングで流れるもんなんだ！

つてことはまだ……序章！？

あんだけやつといてまだまだ旅はこれからですよっていつのやつか！？

この小説永遠に終わらないんじやねえーのかあー（ぶつりやけ）

「そ、そんな……とほほ。」

「どしたの沙耶？」

「あ、えつとヤンガスの帽子がとれないかなーて気にしてたの。」

「いらないだろその心配！ 確かに中気になるけどもー。」

「どうしたでがす、二人とも？」

「い、いやなんでもないっす」「

「にしても、魔物なんて全然来ないじゃん。」
「たしかにそうだな。」

一方、その頃その魔物は……

「またが、あの船。俺様の上を通るなんてゆるさねーぜー！」

俺様の名はオセアノーン。

この海最強（自称）の魔物だ。
しかしその俺様も機嫌が悪い！

あの、海の上を渡る人間のせいだ。その前にそいつが人間かどうかも知らないが。

「ふつ、俺様がこの頭痛アタックで落としてみせるーー！」

俺様は勢いをつけて海の中から船を狙い…………！

ガゴンッ！

「わっ、船が揺れた！」

「なんだなんだ？」

急に船が揺れたかと思ったら赤い物が浮かんできた。

「あ、エイト。タコだよタコ！ おいしそうだねー。」

「なんかあのタコ。たんこぶ出来てない？」

「あつヒタコも事情があるんでがすよ。わっ戻りやしちゃう。」

私はポルトリンクに戻り待っていたゼシカに報告をした。

「あ、どうだつたの？」

「魔物なんていなかつたよー。」

「これでもう大丈夫じゃないか？」

「これから貴方達は船に乗るよね？ あたしもついていく？』

「い、いきなりだなあー。」

「ね、ねつ？ いいでしょ？』

「いいじょんエイト！ 戦力上がるじゼシカがいたら楽しくなると思つよー！」

「それならいいか。よろしくゼシカ！」

「むちゅむちゅ、よろしくね！」

そして、私達に新たな仲間が出来た。

「よーしハ一 海賊王にわたしゃなつちめいつよーーー。」

なんとなく、言つてみただけだ。（謝れよー）

新しい仲間（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる……。」

「ちよこつと裏話」「——」

作者「次の質問です。沙耶さんのお兄さんはどんな方ですか？」

沙耶「あほです。」

作者「いやもうちょっと分かりやすく…。」

沙耶「じゃああほでバカでオタクでかに以下野郎です。」

お兄さん「ひどい！妹よ、それはひどいぞー！」

作者「おや、沙耶さんのお兄さんでは」「せいませぬか。」

沙耶「ちつ」

お兄さん「純粋だった妹がなんか腹黒キャラになつてるんですけどつ！」

作者「それでは次回、お兄さんの生態について語りたいと思つています」

はじめと見ていいですか？（前書き）

キャラクター紹介

ゼシカ ボンキュッボーンな少女。沙耶と同じ年には見えない。

武器はムチ。スキルは短剣 ムチ 杖 格闘 いろいろけ
たあみんなで！ボンッ キュッ ボーン！！

「はじめと見ていいですか？」

「うーん、潮風が気持ちいいー！」

私達は南の大陸に向かう船に乗っている。
しかもゼシカのおかげでなんと船代タダ！

エイトは剣の手入れをしている。

ついでに槍の手入れも頼んでおいた。エイトは武器オタですからッ！
「そういうえば、気になつたんだけど……。」

樽に座つているゼシカが疑問を浮かべた顔をして言った。

「どうしてエイトをヤンガスは『兄貴』って呼ぶの？ 普通逆の気が……。」

「あ、確かに。そういうの全然気にしてなかつたけど、エイトとヤンガスってなんで知り合つたの？」

なんとなく面白そうなので私もゼシカの隣の樽に座つた。
エイトは心クールそうだが見た目はひ弱そうな感じもあるので不思議に思つたみたいだ。

ヤンガスも確かに親分みたいな感じがする。

「よくぞ聞いてくれたでがすよ！ 言いましょう。あつしと兄貴の愛のメモリー…………がはつ！」

「なんでそうなつてるんだよ…」

「え、もしかして二人つ…………！？」

「か、勘違いするな沙耶っ！ 全然そんなんじゃないから…」

「…………。」

「ゼシカの無言が逆に痛い！」

「そう。あれは兄貴が旅出てすぐでがした…………。」

「もう始めてる…？」

『あつしと兄貴の愛のメモリー（仮説）』

トローティーンヒトラペッタを行き来するために作られた橋を陛下と姫と俺で渡ろうとしていた。
しかし……。

「やい、ここを通るなんてこのヤンガス様が許さねえ。装備と金を置いていきな。さもなければ……。」

「なんじゃお前。聞いたこともない奴じゃのう。」「はあ？」こちら知れたこのヤンガスを知らねえだと？
「陛下。どうやら盗賊のようです。どうしますか？」

「無視じや無視。いくぞヒイト。」

俺達は構わず、橋に向かう。

「待て！ 置いていかないならば俺が相手すんぜえ！」「仕方ないのう……。いけ、ヒイト。」「はっ！」

俺と盗賊は橋の上で二人。

「おらあつー！」

突然斧を盗賊が振り下ろす…………も。

「な、なにい！？」

俺はバツクステップでかわす。

「甘いな。攻撃力は強そうだがすばやさはまだまだのようだ。」「く、くそ抜けねえー！」

盗賊は必死に斧を取ろうとしている。

その間に俺達は橋の向こう側に渡った。

「お、おい待てよー！」「お、おい待てよー！」

やっと抜くことが出来たが橋は木で出来ている。

つまり…………。

「うわあっー！」

盗賊は川べとまつやかさま……とうわけだ。

「あ、あぶねえー。た、たすけてくれっ！」

しかし盗賊は橋のロープを持ちなんとか落ちずには済んだ。
だがそのロープももうすぐ切れてしまつ。

「エイト。そんな奴のことなんざほりとけ。さつせといぐぞ」

「しかし……。」

なんとなく、可哀想に見えてその場を離れられなかつた。

「た、たすけてくれえ……」

「…………陛下。申し訳ござりませんが少々お待ち下さい。」

盗賊が持つてゐるロープを引っ張る。しかし思つたより重いな…………。

グイッグイッ……。

「ツ…………！」

「ぐつ…………は、はあー。」

……なんとか持ち上げた。

「大丈夫か？ 怪我とかは……」

「エイトさんっー！」

「はいっー？」

急に盗賊がその場で正座し、俺を呼んだ。

「エイトさん…………いや、兄貴と呼ばせて下せーー！」

「はあっー？」

「一生ついていくでがす兄貴ー！」

陛下も驚き、すぐさま降りてくる。

「おこー！ エイトはわしの兵士じやぞー。そつなれば普通お前がわ

「おっさんのことなんざ関係ねえんだよ。そんなことよつ兄貴ー！」

「付いてつてもいいでがすか！」

「え、……ま、まあいいんじゃないか？ うん。」

「とりあえず戦略になるものは嬉しいし。

だって陛下……口には出せないけど戦闘手伝わないし。

「よひしへでがす！ 兄貴！ー！」

「やうこつわけで、あつしは兄貴につこつこつこつとなつたんでがすよー！」

「なんか、じうでもよかつた氣がするわ。」

「うん私も。」

「なんてこつことをいつとがすか！ ここからが感動するんでがすよー？」

「感動もなにも、何も感じないよ。」

「あ、ついたみたいよ」

「わーーー！」

「ちよ、あつしを置いてかないでえー。」

「…………（スタスタスタ）」

「兄貴も引きながら超スピードで離れないでえーーー！」

「ち、ちくしょーーー 涙で前が見えないでがすーーー！」

はじめと見ていいですか？（後書き）

作者「突然始まり、突然終わる……。」

「ちよこっと裏話」「——ナ——」

作者「それでは沙耶のお兄さん。自己紹介を」

沙介「うつす、俺の名は朝風沙介。あさかぜさすけゲーム大好き！特にファイナルファンタジー——！」

作者「あれ、沙耶の兄なのにドラクエじゃないんですか？」

沙介「おれはあんな感じは好きじゃないんだ。逆に信じられん。」

沙耶「FFの方が信じられないよ！やつぱりDQでしょ！？」

沙介「はつ、あんなドラゴンとそんなに関係ないRPGなんて……。」

「沙耶「そつちじや、なにがファイナルかも分からぬファンタジーじゃん！」

作者「あのー。二人は世間で何て呼ばれてる？」

「「ロープレ兄弟」」

作者「めちゃ納得。」

とりあえず、沙耶への質問。受け付けてます。

破壊は健全だ（前書き）

これもまた、ひきしげぶりですね。

破壊は健全だ

「さて、船着場に着いたところで……。」

「あ、武器とか見るの？」

船着場は結構色々な人がいて、武器とか珍しいのがあります。エイトとか、田キラキラになるんじゃないかな？」

ガシャー！

「あのー……、エイトさん。なにをしていらっしゃるのでしょーか…」

「破壊」

「そーですか……。」

「なにを引いてる。アイテムを貰つてているんだよ。」

「いや全然同意の上とかじやないでしょ！ 武器屋のおじちゃん、震えてるよー？」

「あたしもするべきかしらね……。」

「駄目だよ！ 特殊な人以外こんなことしないよ！ 警察に面倒みてもらうことになるよー！」

「警察つて何でがすか？」

「……え、偉い人だよ。」

しまった。ゲームの世界に現実のこと教えるとめんどくさいのにい。そういう言つてる間にもエイトはガシャガシャと……。

「ちひ、しょぼいな。」

「もう主人公じゃないよね！？ 悪党だよね！？」

「世界を救つてやるんだから、いいだろ。」

「うつ……。それは正論……。」

「それに、沙耶もしてるんじゃないのか？」

「ー」

た、確かにドリクHのゲームの中ではしてたけど…
壺割るのたのしげーとか書いて割りまくってたけど…

「 もへ、ほとんど無いでがすよ。」

「 全部割つてしまつたか…。まあいいや」

「 沙耶がなんか打ちひしがれてる。」

そーか、自分もしてたんだ…。

小さい頃、お母さんの高かつたつぼ（「せものだね」）も割つてしまつたし、

お父さんが大事にしてた、ラップも割つちやつたし…。（凄い怒られた）

お兄ちゃんのゲームソフトを踏んでしまい、割れた事も…。（ぞまあみる）

「そーだよ…。私も、懲かつたんだよ…。」

「なんか沙耶から罪悪感のオーラが出てきたよつー…。」

「ゼシカ。破壊は、文化だよ。」

「なにその、新しい歴史…？」

「あ、ゼシカ。海だよ。」

「話の逸らし方雑ね！ しかも知つてゐし…。」

「わ、私は…、本来捕まるべきなんだよ…。」

「沙耶嬢ちゃん…。」

「こつちなんかもう感動的な感じにひつ…」

「ゼシカ。ツツ「ミは任せたよ…。がくつ…。」

「いらないわよつー。仲間になつていきなりツツ「ミ役とかー」

「あ、ゼシカ。船だよ。」

「だからHイトは何なのー？ もう思ひかめんじゃんやつだよねえー！」

「全く、これだから若者は」

「Hイトもまだ未成年でしょうが！ なにその年上アピールー！」

「あ、ゼシカ。空だよ。
もういいよー！」

ゼシカはもうはあはあ言つてゐる。お疲れ様。
「疲れたなー。宿屋に泊まろうかー。」
「ぜひそうして……、はあはあー。」

一方その頃、ポルトリンクでは。

「…………。わしら、忘れられてない？」
「ひひーん…………。」

「エイトさん。なんか最大の忘れ物をした予感がします。」
沙耶は思い出して言つてみた。

エイトは寝る寸前だつたから機嫌が少し、悪い。

「…………しんどいからまた今度でいい？」

「いや、今取りに行かないと大変なことになりそうで……。」

「くかー。」

「無視して寝られた！」「
仕方がない。私も寝ようか。」

べつせなんともないだらうね。

トロ、テ王は、今日も月の真下で眠れない夜を過ごした。
忘れ物も、ほどほど。

破壊は健全だ（後書き）

毎日疲れる中で小説を黙々と執筆する私……。
なんかかっこよくね！？

韓風沙翁の翻訳……かとおせました。（著者）

最近地の文少なこよつたな版がした。
それはまあいい。まあまあいよいよパートIIシハゴ……

朝風沙耶の憂……すんませんした。

「全く！ わしらを忘れるとは何て奴らじや……」

やつぱり、私達は最大の忘れ物……トローテ王を忘れていた！
「す、すみません陛下……。あまりにも陛下の影が……。」

「なんか言つたかエイト。」

ギロツ！ トローテ王はエイトをするどく睨む。

「な、なんでもございませぬ。」

「ならよろしく。」

トローテは安心したのか、馬車に戻つた。

「しかし、おっさんのせいでポルトリンクに戻つちまつたぜ。つた
く……。」

「だれのせいじやだれの！」

「まあまあ、お一人とも。」

私はとりあえず、二人を落ち着かせた。
手間がかかるなあもづ。

「でもヤンガスの言う通り、船もう乗れないわよ。」

「ほーら、ゼシカ嬢ちゃんも言つてんじやねえか。ばーかwww
「だからわしら忘れられただけで、お前らが悪いじやううが！ あと
と、wwwとか使うな！」

うう、わつき落ち着かせたのにもうヒートアップしてゐるよ……

「沙耶、お疲れさんだよほんと。」

「うう、私ツツコミなのかボケなのかわかんないよ……。」

「大丈夫、沙耶は天然だと思つ。」

「天然！？」

エイトは分かつたような顔してうんうん頷いてゐる。
つてゆうか……。

「エイトだけには言われたくなかった……」

「えええつー?」

「」の小説のエイト紹介文見てみ。」

私は「」には無いはずのPSPからしきものをエイトに授ける。

「ほ、本当だ……。ひでえ、ひでえよこりやあ……！」

その文章を見てエイトは死体を見たかのように弱気な声を出した。

「」のメンバーじゃ、一番まともで常識人だと、思ってたのに……。

「それもおかしいと思つよ!」

ああ、もうシッコミ決定なのか、私……。

ギャグでコメティーなものにはシッコミは必要不可欠だもんね……。

「とにかく、兄貴。早くいきやしょ! や。」

「どうやつ行くの? 船なつて言つたでしょ! へ。」

「いや、兄貴は空飛べるんがすよ。だからそれで。」

「え、空飛べるのー? エイトって人間だよねー! ?」

そう、ゼシカはまだ知らないんだ。

人が空を飛ぶ瞬間。

「さ、兄貴! お願ひしやす!」

「え、ほんとに飛べるの? つてゆーか、空飛ぶって」とはエイトに乗るのー?」

ゼシカはいかにも疑問疑問つといつた顔でヤンガスを責めている。

読者の方ももう分かつたんじゃない?

「…………ルーラ。」

「それかい！？ 紛らわしいわよ…… てかエイトランション低っ！」

もしかすると、シックハマゼシカがしてくれるのかもしれない。
あーやがつたー。

「いやよー。このメンバー疲れるわっ……」

よ、読まれたつ！

つてなわけで船着場に今度はちゃんとトロピカル王も忘れずに戻った。
ほんと、一度手間すぎる。

「え、なんかわしが謝らなきゃいけないの？」

「……まあ、いいんですけどね。」

パーティに無言の嵐が襲い掛かる。
トロピカル一人、おろおろおろおろ……。

「まあ、いいんですけどね。」

「怖い！ 無言の後それ怖い！ 謝るの逆だと思つがちょっと謝り
そうになつた！」

「よしみんな、氣を取り直してこいーーー！」

「「「おー」「」」

「いや、みんな無視しないで？ ね？ ほら、わし待つてゐる間に鍊
金釜という素敵なもの……」

「お、モンスターが来たよー 戰闘だー」

「…………いえーい」「…………

「…………しづしづ…………。」「…………

トロティは一人、馬車に体育座りで顎を見つめた。
……可哀想な王様。

一方、とある酒場にて。

「くっ、フラッシュか……。」

「まだまだたぜ！ おらあ！」

盛り上がる、人席の周り。俺はそこの真ん中でいる。
とは言つても、周り全員むさい男だらけだ。
つたく……可愛い女の子でも来いよつづーんだよ。ちくしょー

「ふん、さつさと終わりにしてやるよ。」「…………

「なに！ フルハウスだと！？」

さて、と……。帰りますかね。

「待ておらあ！ てめえ、イカサマ使いやがったな！」

「なんの事だい？ 俺様はただ、真剣勝負をしてただけだぜ？」

「てめえええ……！」

ふ、こいつの頭の悪い脳でも俺のイカサマを見抜いたか。
そこだけは認めてやろうかね。なんもあげないけど。

「野郎共…」こいつを殺れええええい…！」

「「「「おおおおおおおおおおおおおお…！」」」

予想以上にこいつは、暑苦しいみたいだな。

「さて、どうしますかね。」

「俺様に出合つたことを呪うんだな…。」

「ふ、それはこっちのセリフさ。」

このククール様が相手してやるか……。」

その時沙耶達にも考えられない、最低の男がいること…、
まだ、誰も気づいていない…。

朝風沙耶の憂.....すんませんした。（後書き）

沙介「突然始まり、突然終わる…。」

ちよこつと裏話「一ナーナー！」

沙介「わーぱちぱちー。」

沙耶「……なんでいるの？」

作者「……いやなんか、出たいつて……ずっと。」

沙耶「ずっともいやだよ！」

沙介「はつはつは。照れるな我が妹よ。」

沙耶「照れてないつ！」

沙耶「だいだい、お兄ちゃんつて本編に出ないんでしょ！？　なのになぜ！」

沙介「いや、実は出るらしいんだ。」

沙耶「……嘘だろ？」

作者「ほんとだよ、ちよつとだけだけど。」

沙耶「ちよつとも嫌ああああああああ！」

沙介「はつはつは。照れるな我が妹よ。」

沙耶「あんたの田はフナか！　どこが照れてるよ？」「見える！？」

作者「兄妹が壊れたので、今回はこれで！　グッバーイー！」

喧嘩しても仲は良くない（前書き）

『男さんが登場！』

喧嘩しても仲は良くない

「ふいー。結構こここのモンスター強いね……。
「あ、沙耶。あそこに大きな建物があるわ！ 頃も早く！」
ゼシカが示した指の先の建物は、とても大きな修道院だった。

「ほんとでかいな……。ここは確か。」

エイトはトロデ王に視線をやる。

「ああそりゃ、ここはマイエラ修道院じゃよ。」

視線に気づいたトロデ王は答えた。

マイエラ、マイヤラ、マイメロ？

「そうか、ここでのピンクのつせきに出来たんだね。」

「なに考えてたのかは知らないがそれはないと思つぞ沙耶。」

エイトが正確なつしこみに入った。

「つしこみでもらえただけでもありがたく思え……。」

「エイトー沙耶ー早くー！」

「兄貴いー。嬢ちゃんー！ 置いていくでがすよー？」

いつの間にかゼシカとヤンガスが建物の扉の前にいた。
それを私達は追つて、修道院の大きな扉の中へと、入った。

「つて、あの二人どこ行つたんだよ。」「ひえー、門もでかけりや中も広いんだねー。」「早速迷子……。いやある意味ゼシカ達が迷子？」「いろいろ聞き込みしてみようよ。」「そうだな。あ、すいませんちょっとといいでですか？」

「なんじや？」

頭ツツルツツルピッカピッカのおじこさんに話しかけた。

「おじこさんとは失礼なつ！ わしはまだ20じや

！

「…

「「は？？」」

今、なんと？

「だから20と聞かとるじゃねつが！ お前ら頭も悪ければ耳も悪
いんか！？」

うわ、今はいくらなんでもカチンときわけやつね。
「でもエイド。怒らないでお」……」

「せり、いぐら爺さんでも今の言葉は聞き捨てられないな……。」

武器… ok！
魔法… ok！

スーパーハイテンション… ok！

「つて駄目に決まってるわ

……」

思つよりも先、私はエイドを呑み張りその場を離れた。

「痛いつ、痛いつて！ ちぎりぬなあーー！」

「問答無用！」

ただでさえ迷つているのに私はエイドを呑みすりながらがむしゃら
に走つた！

「服破れるつて！」

「問答無用！」

ただでさえエイドは薄着を着ていて構わず走つた。

「首絞まるつて！」

「問答無用！」

ただてさえエイトは首が細いのに構わず走る――
「千の風になるって――！」

「問答無用！」

「いいの！？ なつてしまつても無視なの！？」

「問答無用！」

「うわああああああ―― 沙耶が怒つてゐううううう――」

「当たり前！」

とにかく走る。走る走る走る走る……

ドガツ！

「い、いたたたたたた……。」

突然、誰かとぶつかつた。

「誰だ、神聖なるこの修道院を走る奴は！」

「わわわ、ごめんなさい！ お、お怪我はありませんか？」

「おや、お客様でしたか？ それはそれは申し訳ない。あなたこそ
大丈夫でしたか？」

「あ、いえ……。」

背が高い人だな……。それになんつかどつかで見たことのある……。

「おい、俺には謝ることはないのか？」

エイトが立ち上がり、背の高い青い服を着た男の人の真正面に行つ
た。

「申し分けない。あなたもいたのですか？」

「……つ。」

「ははは、背が低くて見えませんでしたよ。」

「…………つ。」

「しかし野郎よりも女性の方が好みでしてね。そこをどいても
られます？」

「…………だまれ」のM野郎。」

「……ついにHイトが言つてしまつた……。」

「そう。この人は頭が……M字なのだ……つ。」

恐らく本人も気にしているのか、その額に血管が浮き出る。

「ほつ……」のマイエラ修道院団長こ……そのような事を……

「へえ……、マイエラはイケメンが多かったと聞いたけどおっさんもいる
んだなあ…………」

ビキビキビキ……二人の間に火花が散る。

「（沙耶、ここは放つておきましょ）」

「（あ、ゼシカ！ うんそうだね。大変そうだもんね。）」

ゼシカに呼ばれて私もそつとその場を離れた。

「…………で沙耶…………ってあれ？？」

エイトは周囲も見るも、このMしかおらんや。その状況にMも気づか。

「「あいつ話の途中で帰りやがった！」」「

見事にハモったようでした。

喧嘩しても仲は良くない（後書き）

あれ、マルチエロッてこんなに女性好きだっけ

祝100000アクセス突破！ 番外編『学校生活』（前書き）

ビー も ビー も、 あ な た だ け の ナ ッ ク で す

……「 め ん な わ い 。 だ か ら そ の 包 丁 を お る し て く だ さ い ……

……は い、 そ れ で は 番 外 編 で す。

沙 耶 の 学 校 生 活、 そ し て い か に も 最 終 話 の 前 話 み た い な 終 わ り 方 の

番 外 編。

お 楽 し み く だ さ ま せ。

祝100000アクセス突破！ 番外編『学校生活』

沙「やあ皆ー ドラクエ8でおなじみの沙耶だよー！」

エ「だれに言つてんの。急にどうした。」

沙「なんと作者がいない間にいつの間にか10000アクセス超えていたんだよー！」

エ「もうちょっと毎日チェックしようよー！」

沙「しかもしかも、今だにククールが仲間になつてないのに番外編だよー！」

エ「すまん…… ククール…………。」

沙「さあ皆ー 番外編はやりたい放題やるかんね！」

エ「いつもやりたい放題しているような気もするが。」

沙「ああ、はつじまつるよーーー！」

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女 番

外編

（朝風沙耶の学校生活）

今は8：00である。ちなみに学校へは8：45分。
そして学校はでは30分かかる。と、いうことは？

「そう、遅刻になつてしまつのだよー。」

「じゃあ早くいけよー！」

私がガツツポーズを決めたところで兄の一喝。

「ふ、一喝に言われたくないね。」

私は片手をひらひらさせながら挑発してみる。

そして私は起きたばかりで朝ごはんを食べている所さ。

「二ートじゃないわ！ つといつか深夜までドラクエしてゐる前にも言われたくない！」

「お兄ちゃん」や、FFしてたくせに……。」「うぐひ

兄……朝風沙介は胸をおさえた。……ふりをする。

「二人とも～。喧嘩しないで用意しなさい。」

朝風家一番の天然、お母さんはのんきに洗いものをしていた。洗いもの……

「お母さん……今日、仕事じゃなかつた？」

「あ、そういうえば母さん準備してないな……。」

突然、お母さんの額からだらだらと尋常じやないほどの汗が滲みでる。

この反応はやつぱり……

「やうだつたよう

「やつぱり忘れてた！」

すっかり忘れていた。

！！

「おい、沙里子。俺の朝飯はないのか。」

「あ、あなた……。」

出ましたよこの家の大黒柱。

会社でもとてもお偉いさんで、いつも怖い性格をしている、礼儀にはうるさいお父さん。

そして唯一空氣の読めない人間。

そしてわがままもある。ツンデレもある……え、それはいらな
い？

「……一人とも、学校はどうした。」

「え、あ、その……。」

「ち、ちょっと今は……まだ……。」

「まだ、だと？」

ギロリ。

お父さんの眼が妖しく光った。

「「い、行つてきま～すッ！…」」

急いで靴を履き、その場から逃げるかのよつこ（実際は逃げた）出かけた。

「あーもうッ！ お兄ちゃんが話しかけるから遅れたじゃん！」
「俺は注意してやつたんだぞ！？ そもそも、注意したのに俺まで遅刻しそうだらうがッ！」

私達兄妹は朝っぱらからガミガミガミガミと言い合ひを続けた。
時計はもう30分は軽く超えちゃつてます（汗）

「んじやー！ 私こつちだから。」

「おう、お互い遅刻だがあ頑張りうぜー！」

お兄ちゃんに別れを告げ、学校に向かつて走つた。

キーン…… ハーン…… カーン……

「ギリギリセーフー間一髪！…」

私は叫びながら教室の扉を開けた。

「おおっナイスすべり込みっ！」

周りに尊敬のまなざしで見られる。いやー、もう、もう。

「いや、アウトだから朝風。」
「これ授業開始のチャイムだからな？」
「へ？」

先生に言われて時計を確認してみる。……。

「さて問題。今何時でしょう？（最高の笑顔で）」

「えーっと……。夜の九時？」

「お前はどこを見れば夜と思うんだ！？ 朝の九時だ！」

「……せ、先生！ この時計間違ってるとは思います！」

「大丈夫だ。俺の腕時計は正確だから。」

「……。」

ああ、もう言ひ返せない。

クラスメイト達は私が遅れるのは何回も見てきたので、微笑ましい空気になってる。たすけてくれよ

「せんせーい、授業始まるのが遅れますヨー。」

「うおっ、そうだな。授業始めるか。」

よつしやああああ！ ナイスクラスメイト！ 心の友よー。

「では授業が終わったらたっぷり話しあおうか」

「…………はい。」

うん現実は甘くなかったよ。

「…………これで38回目の遅刻、だな。」

隣の席の男子が呆れたようにしてなにやらメモをしてくる。……ち
ょメモすんな！

（うー、はやく帰つてドラクエしたーい。モンハンしたーい。）

ああ、そういうえば今日『ドラクエ』の発売日じゃん。ぐうー学校休め
ばよかつた！

授業そっちのけで私はノートに『かつたるい』と数回書いた。
たるい、樽井、たるい、たるい、たるい、たるい、たるい……樽井

なんて誰。

「ほひ、俺の授業で落書きとは肝が据わってるな朝風」

……汗だらだら。

「あと解答の所にかつるたい、とは。ふふつ……俺もなめられたもんだ。」

違うんだ先生。これは手が勝手に……

「これはもう授業どころじやないな？ なあ皆、先生間違つてないよな？」

先生から発する謎のオーラ。威圧感が溢れてくる！

クラスメイト一同『は、はい！ 先生は間違つてなど、いまさせさせんツ！』

威圧感に怯えた生徒達は「くくく」と高速で首が折れそつなくらい頷いた！

つてゆーか信じたのにみんなから裏切られた！？

「つてなわけで、先生朝風とお話していくわ」

「そ、そんなつ！ ほ、ほらみんなの授業できなくなるし……」

クラスメイト一同『いつてうつしゃいませ！ お元気で！』

「んなつアホな！」

「嘘だッ！ 嘘だ嘘だ嘘だ……！」

「それではみんな、各自自滅……」

クラスメイト一同『はーいー』

「嘘だあああああ」

「！」

私は先生に引きづりれたまま、教室とおわりました。

クラスメイト『でもあれ自業自得だよな。』

そして何事も無かつたかのようにみんな机に向かい自習を始めた。

それは、私が暮らす毎日の学校。
今ではドラクエ世界にいるから学校にもいけないけど、すこし寂しい。

毎日ドタバタはさすがの私でも嫌だけどね……。

今ではみんな、モバードーするたまご、ハートガ、家族にも会えないし、この世界も「ハナビ」でもやつぱり一回、あの世界に戻りた

ああー、二つの世界を行き来できたらいいのに……

「どうした？ 行くぞ沙耶ー！」
「あ、ごめん」めん。今行くよ

今日も私は、戻る方法を探しながら仲間との『絆』を深める。

まだまだ道は長い。そしてこの夢のような現実の世界がいつか覚めるとthoughtも

それでも私は今日も一日、仲間と一緒に歩きはじめる。

終わりの道へと、歩きはじめる。

祝100000アクセス突破！ 番外編『学校生活』（後書き）

ほんとはショートストーリーで色々な番外編も考えました。

沙耶えもんとか、ハチたろう（ハイトをハチと読みももたろう風）とか……

うん果てしなくドراكエ関係ねえ！

本編にも関係ない！

あとは飲み会だとか花火大会だとかみんなで海とか世界一周寄り道旅とか……。

あれ本編よりも番外編の方がアイデア出るんすけど。ビーゆうこと？

それらも日を改めて考えていいこうと思います。（私が書きたいだけ）

それでは今後ともこの小説」ときをよろしくお願い致します。

グッバイ！エブリワーン！！

赤い人って血まみれのイメージがあるよね（前書き）

やつとパンコンが正気に戻った……。

赤い人って血まみれのイメージがあるよね

「で、あなたたちはどなたでしょうか。」

なんか偉いさんみたいなこの部屋でマルチ口とかいう人と話している。

なんとこの人、ここは団長をいらっしゃるのだ。そつここの威厳っぽいのはそのせいか。

「俺達旅の者です。ドルマグスって奴を探しているんですが……。エイトはさつきとはまるで別人のよつに丁寧に話していた。……ですが

「ドルマグスですか……。聞いたことがありませんね」

頭がM形のマルチ口さんは興味ないです感ふんふんで返事をしてきた。

「じゃあ、ここ宿ありますか」

「ここから先にドーーという町があるのでそちらへいやめっちゃ客室みたいなのがありますんでした?

「じゃあここには用無しでがす！」

ヤンガスが急に仕切りだしたのでそれになんとなく従つた。マルチ口さんもはよ帰れと言いたげだし……

「はよ帰れ」

……実際言つてますから。

「じゃあそのドーーとかいう町に行きましょうよ

結局ここに来た意味なかつたなあー。

「疲れたでがすう……はやくいきやしち」

「私も休みたいよお……」

足がさつきからじんじん言つてるよ？

「……なんか俺、嫌な予感するんだよね。」

エイトだけ険しい顔のまま、私達はドーーの町に向かった。

「……やつぱりですか。」

情報得るため酒場に来たけれど……ひどいものだった。

「くつ、俺と出合ったことを後悔するんだな」

「ぐつうう……」

「お、親方あーー。」

なんかむさこおじさん達が恐らへイケメンであらう赤い人と喧嘩していた。

「うおおおーー、喧嘩でやんすか！ いいでがすねー。」

「こちらもむさこおじさんガ騒いでいた。……うそうるせー。」

「いつのには関わりたくないんだよなあ……」

「やうだね……」

私達は（ヤンガス以外）向こうのテーブルでのんきに注文をしていた。

「つていうか、つるむさいわね……」

ゼシカがいまにもメラを放ちそうになつてゐる。え、それってやばくない！？

「あーあ、ヤンガスが喧嘩に参加しちゃつたなあ

私達にも被害がきそうで怖い。

「エイトはいかないの？」

「めんどうだよ。大体、攻撃を食らう方が可哀想でしょ」

確かに、今の私達ならあんな庶民（笑）簡単に殺れるだらうね。

「うわー、やつきの人にすごと飛ばされたわー」

「わあー、あっちなんてファミコンしきものが投げられたよー」

「ファミコンって何沙耶？」

そういうえば、ソ○・と任○堂とはメーカーが違うからドクターコンパニーテだし空氣を読むなこことは、プレステを投げるべきかもしない。

え、どつちも投げんなって？

「ねえーファミコンて何ー?」

ゼシカがしつこく言つて教えてあげようか。

「時代の文化たぬき」いんたぬくにゆき奥深いんたぬき

道無に間違ふと申すとハ正でキたる事

「えっへん。そうだろう!! なんせ私は書ケーパー

いたからねえ！」

「すいこね！ 憧れるうー」

「いやー、それほどでも~」

うん照れるね。」「ここまで純粹だとなんでも信じるよ。

うんなんかエイトがこっち見てる気がするけど……」は無視だね。

「あ。もうほとんど片付けられてるぞ」

もう残っているのはヤンガスとちよけてる感じの赤い人とむさいおつさんだけだつた。

「なんか沙耶嬢ちゃんから酷い」と言われたよつな気が……」

「氣のせいだな。田代、おひやをくわくまう。

はあ……でか戦闘手伝ってはくれないんでかうね」

「あなたなら……。一体誰なんだ？」
急に赤い人が今更聞いてきた。

おいらでめえ！ 話終わってねえぞ。」「あくまでも、なまつぱつしてカンタガ

けどみんな無視。無視なのだ。だつてうざいから。

「俺か？」俺はまあそこらの暇人みたいな感じか」

「おーお前らも無視すンじゃねええよ！…」

「つまり、二一トなんだね。可哀想に……」

「いやちげえよ！？ 言つとくけどひやんとした仕事ある人だからね！？」

「ちょ、まさかの俺空氣？ 結構派手な服なのに目立たない感じ？」

まだ騒いでるよこのおつちゃん。

「いい加減でめえら、覚悟しやがれええ！！」

遂にキレだした。

あー、どうなつてもしらないからねえー。

「おい！ お前の相手は俺だぜ！」

これまたさつきまで空氣だつたヤンガスが急にかつこつけた。
まあまあ。斧なんて持つちゃつて。

普通にあの人死ぬからね？ ビうみても。

「つてキヤー！？」

「にゃー！？」

急に誰かに手を繋がれたと思つとまさかの初対面の赤い人に連れて
行かれた！

「沙耶！ ゼシカ！」

「あんたも来な！ こつちだぜ！」

そのまま私達は酒場の裏口から脱出。そう、ヤンガスを置いて……。

赤い人って血まみれのイメージがあるよね（後書き）

「ちょっと裏話」「——！」

作者「お久しぶりですみなさん」

沙耶「……遅れすぎたよー」

沙介「俺ら忘れてる人いるんじゃねえか？」

作者「……えへ。では新」「——！」

沙耶「ウザイ上にさりげなく流した！」

作者「クイズでもしようかと思いません！」

沙介「あー、あれね。」

沙介「えーっと。今の沙耶のレベルは何レベルでしちゃうか？」

作者「なんとなーく考えてみてね！」

沙耶「答えは次の前書きで発表かあ……。」

それでは、また次回！

だって

バカリスマ！（前書き）

視点切り替え使ってみた。

バカリスマ！

「ふいーここまで来れば巻き込まれることはないか」
赤い服の人はため息をついた。

「ちょっとあんた！ いつまで手繫いでるのよ！」
ゼシカがカンカンになつて怒り出した。
はつ！ そういえば私もなんか手繫がれてる！

「ジ

心なしか、エイトがジロ目でこちらを見てる気がする……。
「まあまあ、お二人さんたち。これはお近付きのしるしとして

チユ

「〇X 2* !?」

あ、あああか、赤い人が！
わた、私の手の甲に！？

「ちょ、あんた沙耶になんてことして

「ははは、こちらのお嬢さん方嫉妬かい？」

なんとむかつく態度でしょう。

赤い人はこんどはゼシカにも手の甲にキスをしましたとさ。

「……おい、お前……」

エイトがこんどは怒りの形相で赤い人を睨んだ。

「ん？ 君もまさかとは思つたが…………女の子？」

「お前一回死ねええええええええ！」

とうとうエイトが背中の武器を取り出し……ってええ！？

「ちょ、エイトそれはさすがに！」

「いいえ、沙耶。ここは見守るべきだわ……」

「はい！？ 何言ってんのゼシカ！？」

「この人死にかけないでしょ！？」

「こんなやうは死ぬべきである！ でしょ！」

「……確かにそうだね」

なんかあの赤い人もレイピア出してきたし。

*

「さて、どうすつかなー」

「ここまできたからには本気でいくからな。保障はしてやらん
もつ俺は限界だ。

このやろー沙耶にまで手を出していくて……

「一応死ぬ前に名前を聞いてやる。俺はエイドだ
「ずいぶんと余裕なこつた。……俺はククール」

ぐるーる？

ぐるぐるー？

「……先制はもらつたああああー！…」

「なにい！？」

しまった！ 気をとられて先制をとられた！

「卑怯だぞ！ えつと……クルクール？」

「ちがうわ！ ククール！」

「甘いわあああー！…」

「なにい！？」

「これぞ俺の実力！ 相手がつつこみを始めたら攻撃すべし！

「ひ、卑怯だぞ！」

「どつちもどつちだ！」

戦闘は頭の知恵で有利が決まる！

「かえんぎりつ！」

「どうわあ！ 僕の髪燃えるつて！」

「しかしエイトはなにも聞かなかつた！」

「ひでえ！」

俺の怒りはノーストロードぜ！ 明らかテンションおかしくなつてます。

*

「なんか、二人結構楽しそうだね」

「まあノリノリでしょうね……」

どーもー、沙耶です。

いやあ視点切り替えつて初めて使つたけど難しいですねー。
え？ 過剰発言頼むからやめてつて？

はつ！ そうだ私なに考えてるんだね？

なぜか脳がキヤツチして……

「はあはあー、え、エイト強えー！」

「まあ一応旅してるしな」

どうやら結果はついたみたいだ。

エイトの勝ちつてことかな？

「いてて……」

赤い人……ククールだっけ？ ククールのポッケからなにか落ちた。

「なんか落としたぞ？」

どうやら指輪みたい。

「ああ、それやるわ。特に必要ねえーし」

「こんなの貰つてもねえー！」

ゼシカが嫌そうな顔をしながら返そうとした。

「はっはっは！ もしかすると将来俺との結婚指輪になるかもしないぜ？」

「なむれ、ひーひんわー！」

そりや怒るわな。ある意味セクハラ？

「まあまあ一いや、俺は戻らなきやいかんので

妙に変な走り方でククールはどこかへと消えてしまつた。

「…………え？ ど、どうしたの？ あれ？」

「返品しないのもつらい。こんなのが迷惑だわ」

これが「正」の綱章だな 戻るが

トヤツシハ三側道院の折轉りし

月刊
雑誌

「憎ひつていいのかなんといつか…………まあそんな感じだらうなー

え、あんなのが僧侶？意外すぎて目が出るよ！

「あれが僧侶じや世の中腐るだらうね」

「…何気に酷いな沙耶」

「そうかね？ やつをじーい沙耶さんもそんな」と言われるもんかね。

「と・に・か・く・い・れは返しこきましょう。」

「その前に宿屋に行きたいんだけど……」

エイトは戦つたばかりだもんね。

「じゃあ宿屋にいこよ！」

「じあ畠田でも返しまじゅうか」

ふんふん

セリゼー・セリゼー・憩いの場――

「兄貴！ 嘘嘩終わりやしたよー……ってあれ？」

しーん……

「えつとー……おやか？」

しーん……

「また置いてかれたあ ああああーーー！」

バカリスマ！（後書き）

ヤンガス……もうすぐ君は少し楽になるや。なぜなら……ククールという最高のいじり役がいるからだよーー！

お年寄りは大切に（前書き）

この前のクイズ……答えは？

沙耶「今11ヶ月だよ」

意外と低いですね……低レベルクリアでも田舎してるんですか

沙耶「……戦闘シーン入れないからだよ」

さ、さて！そろそろ本編どうぞ！

沙耶「逃げた！」

お年寄りは大切に

朝日も昇る、爽やかな朝がやつてきた。
しかし、なぜ私たちはこうしてげつそりとしているのか。
なぜ、テンションが低いのか。

理由は一つ……

「ゼシカ、沙耶。今すぐ俺の部屋へ来て。緊急会議だ」

「…………うわあ」

朝っぱらからエイトのお呼び出し。まじめ人間のエイトからした
らこれは珍しい事だ。

そして私たちもなんとなく勘付いていた。

「さて、大変なことが起つた」

渋々エイトの部屋へ行き、なんとなく正座してみる。
正座は日本人の正しい座り方だからねつ！

「その内容だが」「ぐがああああー」……ツ

ヤンガス……お前の空氣読めなさは世界に通用するよ。

「すまんヤンガス。君には安らかに眠つてもらつ」

そう言ってエイトは拳を構え

「ぶがああッ！？」

ヤンガスのお腹へとダイレクトアタックした。合掌。

「ぶぎ……ZZZ」

それでも眠れる君は超人だよ。

「これは置いといで。会議を始める」

「いやエイト。置いといたらまずいでしょ」

ゼシカによる冷静なつっこみ。

「ヤンガス……君のことは忘れないよ。今日の8時まで多分」

「いや沙耶。その涙は明らか偽者でしょう?」

ヤンガスよ。君の永遠なる眠りを見守つてあげよ。……だるいからやつぱバス。

「大丈夫だ。彼を殺さぬよう死にたいぐらこの痛みを感じさせて、その痛みは永遠に続き夢の中もがき続けるだけだから」

「むしろ殺してあげた方が! そんな思いするくらいなら殺した方が楽でしょう! ?」

「駄目だよゼシカ。仲間の思いを一番に考えてあげないと」

「その発言全部、貴方に返すわよ!」

なんか話が一向に進まないね。

そうだ。この隙にここから逃げ出して地獄会議を抜け出そう!

うむ、我ながら完璧な発想! では……サラバジヤ!

「どこに行こうとしているのかな? かな?」

「え、えいとサン……」

沙耶の野望、完! 次回もお楽しみに!

「さあ、話が進まないからさつと会議するぞ!」

「いや、進まないのはエイトのせいかと」

「ちなみに沙耶は、今日は朝ごはん抜きだ!」

「ごめんなさいそれは勘弁してください」

ジャンピング土下座を沙耶は習得した! しかしあまりいらなかつた!

「大変なこととは、陛下のことだ」

「最近出てないもんねえ。そりゃあ大変なこつた」

「沙耶は少し自重しなさい」

「……はい」

「で、そのトローデ王様に昨晚『飯を持っていくのを忘れてたと

「その通りだ、ゼシカ」

……やっぱりね。

私たちも今日の朝氣づいたんだよねえ。

「あのわがまま王様が怒らない以外はあり得ないわね」

「ただでさえ、出番無いのにねえ」

「だからどうしたものか……。困ったなあ」

ちょっとシユミレーションしてみる。もやもやー

『わしが村の外で腹を空かせながらお前たちは……おいしい飯を食つて……』

こんな感じに拗ねるだろうなあ。我ながらそつくりだよ。

「では、誰が謝りに行くか決めよつ」

「いやいや、ここはエイトが

「いえいえ、ここはリーダーが」

「そうか。君たちは『飯がいらない』と言いたいんだな

「『めんなさい』」

「よろしい」

この人、めっちゃ脅迫してる。

まあ食事はエイト担当だからね。

「ここは平等にジャンケンで決めよつ

「それが一番だね……」

「絶対負けないわー！」

周りに『ガガガ…』もしくは『わわわわ…』といつ擬音が見えた。

そういうのはカ○ジさん任せよつ

「ジューングーケーン ホイッ！」

「……うつ」

「エイトがチヨキ

ゼシカもチヨキ

私は……パーだった……。

「弱つ……」

「グサツ！」

なんか私の胸に矢刺さつてない？
痛いんすけど。

「では罰として沙耶が謝る係りで」

「うう……やだよう……」

「どんまい沙耶。まあ頑張りなさい」

皆慰めてくれた。しかし代わつてあげると言つ人はいなかつた。

「行つてらっしゃい……」

「逝つてらっしゃいだなんてひどいよう……」

「いやそっちはじょないから

私にとつたらそれくらいなんですよおつかれだあ

「じゃ、お元氣で」

一人はもう旅の準備をしてくる。ひどい！

それでも仕方なく謝りに行く。まあ、お皿無しはキツイしなあ。

「でも……絶対怒られるわあ……」

むしろ怒られない方がどうかしてる。

「うわあ……いるよ、いますよ。悪魔のシャイターンが」

緑色の奇妙な生物。その後姿を見るだけで精一杯だった。

「どうしよう……でも負けちゃつたし…………ここはいつそのことヤ

ンガスに……」

ヤンガスが氣の毒すぎる。どれだけ彼は仲間にこき使われてるのだ。

「まあ、その中に自分もいるんすけどね。はは、あはは……
ええーいつ！」

そのまま私は悪魔トロテのもとへと駆け出した。

「たのもー！」

「うわ！？ なんじやこきなり！？」

さあ、ここのまま突っ走れば怖いもの無しだ！

「ところで最近の3Dってすこによねー映画はもちろんテレビやDVDまで3Dになっちゃってさあー一大迫力でお腹いつぱいつて感じでえーあれだけでご飯3杯はいけるねうんまじでもそのせいで視力がちょー下がったんだけどどう思つ？ そこんとこどうかな？」

「とりあえず落ち着け」

「ぜえ……ぜえ……。息継ぎ無しでここまで言えるつしてくね？ これだつたらゴーラー気飲みしてげっぷする前に都道府県言えるんじやね？」

あ、ごめん私地理弱いわ。

「一体どうしたらそんなことになつたのじゃ……沙耶……」

王様が憐れといった目で見てきた。

「ところで昨日……眠れました？」

「いきなりなんじやその話題！？ 前置きはなんだつたんだ！」

「そうですか……疲れ、なかつたんですね……」

「わしあまだ何も言つとらん！」

「そんな貴方に睡眠薬 一瓶くらい飲めば効きますよ」

「殺す気！？ わしを殺す気なのか！？」

「やだなあ王様つたら。そんなに喜んじやつて」

「どう見たらそうなる！？ お前老人虐めて楽しいのか！？ わ、さすがに疲れてきた……。喉が痛い……。

15分間お待ちください……。

「昨夜？ 飯ならヤンガスが持つてきとつたぞ？」

「あ、そうなんでしたか。よかつたあー」

うむ、まさか彼が役に立つとは（ひでえ）

まあ……哀愁漂つていたんじやが……」「

置いて帰^セせや^シたか^シなあ^シ。一^ハん 懐^カれ

カナダ

「忘れてた
のか

「うんうん、エイトもゼシカもだよ？」
「でもまあ結果オーライって
わけだ」

「ふーん、それはよかつたのぉ…………？」

危ない沙耶！後ろ後ろ！……しかしそんなことを言ってくれる人

ପ୍ରକାଶନ

この瞬間、私は後悔の波へとビックウェーブする。

「全員呼んで」おおおおおお

……その後どうなつたかって？
まあ、想像はつくんじゃない？

お年寄りは大切に（後書き）

今回読みづらかったと思ひます。
流し読み程度で十分だね。

……べ、べつに隅々まで読んで欲しいわけじゃないんだからねつ！
なぜにシンデレラ？

特別「ラボ回」～異世界の勇者と異世界の一般人～（前書き）

なんと今回、御徒さんとのコラボです。
遅れてしましましたが、なんとか完成いたしました。
エイトイラストについては……もうちょい待つて
と、いうわけで本編コラボ回をどうぞっ！

特別「ラボ回」～異世界の勇者と異世界の一般人～

……突然だけど、沙耶がいなくなつた。
いやまあ、普通に夜の散歩とかかもしけないが、何も言わずに出て行くのは珍しい。

ということで、ハイトこと、俺が今探しに行つてゐる。
なにもなればいいのだが……。

「ううー、やぶい」

夜とこいつのはどうしてこんなにも寒いのだろう。

今にも鳥肌が怖いくらいに立つてゐる。

なのにペンギンさんはどうして寒くないのかなあー？
というか、なんで人間に鳥肌というものがあるのかね。
うーん、ミステリイー……」

さて、どうして私がこんな夜に外にいるのかといつと。
あれだよあれ、導かれたんだよ。ワトソン君。

実は導かれし勇者なのだよ私は。いや、ブロッコリーの話じゃなくてですねえ……。

「でもさすがに何も言わなかつたのはまづいかなあ。帰つたらハイトカンカンだらうなあ」

いつもながらのこと、だけどね。

ハイトはあれで心配性ですから……。

この前火傷したくらいで冷やすためにヒヤダルコ使える敵探して

たんだよ？

序盤でヒヤダル「使えるビリカ……私、凍つて死ぬわ。

「この辺だったかなあ多分。さつきの異様な光は」
異様な光……それはさつき私が食事の後部屋に戻ろうとしてたら、
急に青白い光が眩しく輝いて。

気になつたんでその場所に行こうとしてるといふ。

「恐らく、空からなか降ってきたとみる！」

よく漫画とかアニメとかであります那样的バターン……ほら、たとえばの話ド〇「ンボ〇ルが落ちてきたりとか。そんなの見つけたら残りも探すために……いや、同じドーラゴンでも全然違つからね！？ うわー、一人脳内ボケツツコミは切な過ぎる……。
かといって声に出したら迷惑だし、なにより怪しすぎれる。

「つーせつまよつまとはいえ、青いのが近づいてきたなあ」

そういうえば結構すごい光なのにほかの人は気づかなかつたのかな？
多分みんな老眼なんだね。そういうことにじとじと。

「おーい、沙耶！ ここにいたのかー！」

「あれ、ヒイト？」

「なんとヒイトがやつてきた。

ほらやつぱ心配だつたんだろうなあ。

まあ嬉しいけど……なんかホント、ヒイトつてお母さんみたい。

「心配したよ？ 急にいなくなるもんだから……」

「えへへ、『めん』『めん』。ちよつとあれが気になつて」

「……あれか？ つてまぶしつー？」

驚いた声を出すヒイト。その視線の先はもちろん私が追つっていた
ものだ。

「うん、なんだろうねあれ」

「あれは……旅の扉か？」

「旅の扉ですとつー?」

「声大きいぞー沙耶」

「あ、『じ、じめん』」

思わず大声をあげてしまつた。

……だつて旅の扉だよ?

あのドラクエおなじみのいかにも酔いそうなあれだよ?
そりやーあ沙耶さんはドラクエ大好きだもの。反応するよ。
「へえ……本では見てたが……ほんとにあるんだな」
「でもなんで急にこんなところに?」

「さあ……?」

ふむ。不可思議なこともあるもんだ。

まあ、もともと日本人がドラクエ体験してる時点で不可思議体験
だけどね。

「入つてみる?」

「どうぞどうぞー」

「一人でつー? 沙耶は行かないのかー?」
いやあ……だつて、ねえ? (遠い目)

「めんどつちいし」

「じゃあわざわざなんでここまで来たの」

「うぐっ」

「あーあ、明日の『ご飯はシチュー』じょうと思つたのになー。こ
れじゃあ明日かにスープになつちゃうなー」

「つー? か、かにい! ?」

ひーーーあの見た目のおつそろしーーかにさんをかい! ?
私はかには好きだけど、容姿がもうダメで……ほら、蜘蛛みたい
な……うう思い出したくない!

「いやー明日楽しみだなあかにスープ。沙耶食べようとしたいし
行きます行きます! 行けばいいんでしょ! ?」

「ん、よろしい」

セセセ、セーフ……危ない危ない。

というか、エイト食べ物で釣りすぎだつて。

「ゼシカとヤンガスには……まあいいか言わなくとも」

「帰れなかつたらどーすんの?」

「まあそん時は臨機応変に」

「わー、心配になつてきた……。

「じゃあ、行ってみよつ

「…………本当に行くんだ……やつぱいめ！」

「かにスープ」

「わあー！ 楽しみだなあ初ワープ！ ディに行くのかなあー！」

超棒読み

冷や汗が額をつりつゝ過める。

私は完全にエイトの手玉にとらわれていたのだ……！

「よし、じゃあ行くぞー！」

「は、はーい……はあー」

そうだ。

「おまエイドを押しげらかればいいんじゃないか。」

エイトのことだから死にはしないだろう。多分。

「アリサルカニシ」

「向こうへつたがるヤマトさん一派のお嬢様、お見合いをしたひまある

! ?

「そのままダイビングだつー そおーいっー。」

「いやああああああ！」

そして、私たちは渦の中へと取り込まれた。

……しかし。

「…………」「いや、トライペッタ地方か？」

「よかつた……身近なところで」

残念そうな顔をするエイト。

「この人は……ほんと、好奇心満載なんだから……。はう……。

「でもさつきまで夜だつたんじゃ……」

「確かに、おかしいね……」

「今はどうやら暑っぽい感じ。

なぜならばこんなにも太陽が輝いているから。

「とりあえずルーラしてみる。つかまって」

エイトはルーラを唱えてみる……も。

「何も起こらないね……」

「こここの移動候補が全く無いな。どうこうことだら……」

私はエイトの服を掴みながら考えてみる。

ルーラができない場合、MPがないか移動するといろがないかの一
つ。

エイトのMPは満タン。

そしてさつきはドニーの町の宿場にいたはずだからおかしい。

「魔法が失敗したとか？」

「まあ、それぐらいだな。とりあえずトライペッタ田舎そいつ」

「そうだね」

そうして私達はトライペッタに行へることにした。

「やつぱいの辺の魔物は弱いな」
今のところ全部おどして進んでる。
このシステム楽だわー。

「トライペリタつてんだつナエイテ」

「あー、その辺じゃない?」

なんて適当な返事なのだ。

そういうえば、エイトは方向音痴だった。

「……今すぐい不安といつ気持ちに溺れた気が

「なに言つてゐんだ沙耶。俺が迷うわけないだろつ？」

過去に何度も迷つてたから不安なんですよ。ええ。

「感心ヘタシペリトせよウソシだ。」

「トランペッタならともかく、その間違いはあり得ないよね」

なんか器用な間違いをしていた。

反対から読んだんだね

「んー、こんな道来たことないような気がするんだよねえ」

「へ、こんな道もあるのかあ……」

あーこれ以上王イトに興味心を持たせたら大変なことになるんじ

七

早く帰りたいなあ……。歩き疲れたよ……」「

「ほらほら、運動が足りないぞ？」もう少し頑張らなきゃ

לען -

なんかもう暑いし……。

砂漠を歩いてる気分だよ。

あそこに誰かいるぞ？ 道聞いてみよつか」

「……アリマセぬ？」

目を凝らして見た……が、人姿は見当たらない。

「見えないの？」 ほら、あそこ。

よくよく見てみれば……豆粒みたいのがつた。

「え、あれ人？」

俺、目良いから。恐らく人だな

人、となれば……GO！走るんだ！

行動はやつ！？
てか足痛かつたんじやなかつたんかい！」

「後のHマークのシグマ//を軽くスルーしながら豆粒へと向かつた。

「つて止まらない！？」

体がすぐに言つこと利かなかつた。

豆粒は次第に大きくなつていき、近い距離までになつてゐる。
「すいませ んっ！ 危ないですからどいてえええ！」

「ふへえ！？」

ギリギリなところで足を上手に滑らせスライディングの立つたままバージョンになり綺麗に止まつた。

「おおーー！」

そしてさつきまで豆粒だつた人からの拍手。うん良い感じ！
「ふうー、ギネスもびっくりする見事なプレーだようんうん」
自分で自分をほめる。それはちょっと嫌だつたがそれくらい気持ちよかつた。

「大丈夫ですか？」

「へ？ あ、ごめんなさい。急に飛び出しちやつて
「平氣ですよ。えつと……」

「沙耶つていいます。17歳のオタ……じゃなくて、変わつた人です」

なんて自己紹介なんだこれ。恥ずかしくなつてきた……。

「ふふつ、私はアスナ。同じ17ですよ」

「あ、そななんだ。じゃあ普通に喋るね」

「うん、いいよ よろしくね沙耶！」

なんていい子なんだ。沙耶さんジーンとしておちやうつよ。

「ちよ、この人いきなり出てきてびっくりするんですケドー！」

「うん、なんかサンディっぽいのが聞こえる。

「ちょっとサンディ……。あ、ごめん今の独り言だからつー」

「へ？ あ、うんそりゃそりだ」

「……？」

「……なんで？の世界に？の人人がいるのか……すんごい気になつたけど。

今はとりあえず、そつとしておけり……。

「おーい、アスナあ。置いてっちゃうよお？」

「アスナ嬢ちゃん。道草くつてないでいくでがすよ」

「あ、うんちょっと待つて！」

……ナンドテスト？

「あれどうしたの沙耶？」

いつの間にか私は頭のこめかみを抑えていた。

それもそうだ。

だつて……ここに、エイトとヤンガスが、いるのだから。

「はあはあ、や、やつとついた沙耶……」

「」で二人目のエイトが登場。うんチヨツト待て

「え、エイトが一人？」

「あ、兄貴が一人？」

「「あれ、俺（僕）が一人いるー？」」

「……い、一体どーいうこと……」

なんか分からぬけど分からぬことになつてた。
えつと……とりあえず、乙？

「というか、ヤンガスここになんで……！？」

「へつ？ あつしは兄貴はともかく、そこの嬢ちゃんとははじめましてでがすよ」

「なにい！ 貴様は私を忘れたというのかあーー！」

「えええ！？ 忘れたもなにも、知らないでがすつー。」

「ど、どうなつてゐるの？」

「さあ……多分あつちの僕とは別人かな？」

「なんか、ややこしいことに……。」

「別世界の俺とか？」

「えーと、俺エイトが喋つたのかな？ 分かりづらいなあもう。

「パラレルワールド的な？」

「だからルーラできなかつたのか……」

「やつかいことになつてしまつた。

まさか別世界に行くなんて……もしかして私は世界を懸ける少女
なのじやないかな？

別世界体験2回目というわけだし。

「あのー、なんか分からぬけど一応自己紹介でもする？」

アスナが口を開いた。

「うんそうだね。僕ともう一人の僕の正体分からぬし」「じゃあ、私から言うね。私はフイ……ではなくて、アスナつてい

うの。よろしくね！」

「僕はエイト。トローテーンの兵士をやつてゐるんだ」

「あつしはヤンガスでがす！」

「やつぱり一人とも同じ名前なんだね……」

「ご親切にどうも。俺はエイト。よろしくな」

「私は朝風……ではなく、沙耶です。よろしくねーー！」

さて、一通り自己紹介が終わつたところで。

「魔物……だね」

「魔物……来てるね」

「魔物でがす！」

「魔物（笑）」

「空氣読めない魔物だなおい」

はーい、強制バトル開始でーすっ！

「スライムとリップスくらいなら、なんとかなんだろ
俺エイトが剣を取り出し、構えをとる。

「（あの構え方……少なくとも、素人ではないね）」

僕エイトも剣を取り出し……周りの空気が変わった……気が

した。

「さて、殺ろうか」

「……あえて、無視しておこう」

「…………らじゅー」

アスナとヤンガスは慣れている、といつた感じでもう戦っている。
「すまないな魔物よ。俺は、もう止まりはしないぞっ！」
「やつぱりおかしいよう……！」

「ツー？」

見事に僕エイトと意見が統一し、見事にはもつた。

「と、とりあえず沙耶と俺エイト！ 戦おうー！」

しかしアスナの一言で我に返る。

「そ、そうだな。いくぞ、沙耶」

「おーけおーけえー！」

得意の槍で……スライム刺し！

うえ、えぐつ！？ スライム刺し、えぐつ！？

刺さつてるのにスライムが笑つてるのが怖いんですけど…

「とりあえず、これで最後かね」

僕（俺？）エイトが剣をしまった。

なんだろう、一瞬ホツとしたような。

「なかなかやるなあー、もう一人の俺」

「そんなことないよ。もう一人の僕こそ、達人ほどじゃないか」

いつの間にか一人は溶け込んでいた。

「けど、すごいね。一重人格ってやつ?」

アスナになんとなく話しかけてみる。

まあ、さつきのあれば衝撃的だつたし。

「あはは……、私も最初びっくりしたんだよ」

「そうだッ！」

私がなんとなく閃いて行つてみる。

これはなかなかいい閃きッ！ピラ〇キーノに出れるくらこッ！

「一人とも、勝負しちゃえッ！」

* * *

「で、こんなことになつた訳ね」「どうも、俺エイトです。

なんか知らないけど、あつちのエイトと戦つ」ととなりました。と、いうか沙耶はいきなりだから困る。ま、慣れただけど。

「じゃ、お手柔らかに」……つと

「うん、よろしくね」

まあやつきのは驚いたけど……でもまあレベル差もあるだらう、勝つだらう。

「大人気ないかもしれないけど真剣でいかせてもらひよ」

「大丈夫、僕も冒険者だし」

そういうて、あつちのエイトは剣を出した。

……なんだらうな、この一瞬で分かる空氣の違いは。

「それではあー」

「「レディースゴーー！」」

沙耶とアスナが元気よく勝負の開始を告げる。

「この瞬間には俺は動いていた。もちろん、あっちもだが。

「それでは遠慮なく……殺させてもらう」

「いや殺つちゃつだめだからッ！ 言つとくけど俺人間だからッ！」

「容赦ないな……でも、剣の腕は確かだ。

「くつ！」

交わっていた剣をはじきさせ、一定の距離をとる。

そして相手がこちらに向かうのを計らい……

「かえんぎりつ！－」

「つ！？」

ちつ、避けられたか。

「なかなかやるなもう一人の俺」

「ふつ、そつちこそ。面白い戦いになりそうだ

「あんましよを見してつとこけんぞ？」

「なぬつ！？」

僕エイトの足をひっかけさせ、転ばす。

「いいか、剣ばかり見ていやだめだ。全身で相手の動きを感じ、隙あれば攻撃をしかける」

これは兵士をやつっている時に嫌ほど聞かされたことだ。まさかこうして役に立つとは。

「すゞい……これは……、なかなかのもんだ」

僕エイトは本当に楽しそうな顔を浮かべた。

それに俺はにこっと笑顔を返してみる。

「じゃ、ひとつから本番なつ！」

「さつきはやられたが……次はどうなるか分からぬぞー！」

久々にいい戦いになりそうだ。

* * *

「……で、まあアスナ」

「んつ？ どうしたの沙耶」

退屈していた私はエイト達の戦いをぼーっと見ていた。

「言い出したのは私だけど……なんかつまんないね」

「うん……、まあお互いなかなかやめないし」

そう、あれから一時間ほど経っているのだ。

それなのには二人はやめようともしない。

「ちょっと世間話でもしてようか」

と、いうことで。

この世界の話とか、私の正体とか、アスナのこととか、色々話をした。

「お互い、異世界同士なんだね」

「その中でも私はただの一般人だけど」

だってアスナは？の主人公らしいんだよ、話を聞いてると。

ここでも不思議なこと起るもんだなあ……。

「にしてもさあ」

「…………うん」

…………ずっと気になつてたんだけど。

「ヤンガス……どうしたのさ」

「…………うう、アスナ嬢ちゃん……わざわざからあつしの出番が

「そういう運命なんだよ。ごめんね」

「じつちでもヤンガスの扱いはひどいか…………」

仕方ないことなのかもしね、うん。

「あ、やつと終わつた？」

エイト達が帰ってきた。どうやら結果は引き分けみたいだけど。

「うわっ！ なにその剣！？」

アスナが驚いた声を出すので思わずエイト達の剣を見てみる。

……まッふたつになつていた。

「どうやつたら、そんなことに……」

呆れた声を出す私とアスナ。

どんだけ夢中だったのか、まるで一人は遊び終わつて帰つてきた泥だらけの少年のように汚れていた。

「いやー、樂しかつた。久しぶりだよこんなに夢中になつたの」

「僕こそ、ありがとう。とても参考になる劍裁きだつた」

「人は共に握手を交わした。すばらしき、友情。

「お腹も減つたことだし、料理でも作るか」

「やつたあー！ おかんエイトの究極手料理いー！」

「沙耶はドッグフードでいいな？」

「ごめんなさい」

「土下座……まではできないけど、頭を下げた。

「ふふつ、沙耶とエイト仲良しなんだね」

「アスナと僕エイトも仲良しじゃん？」

「はは、結局は僕達似たもの同士なのかもね」

あはははは、あはははは、と樂しそうな笑いを続ける皆さん。

「ふつ……やつぱりあつしは……」

「「「「わあ つー? ごめんごめん!」」」

それでも、楽しい時間が過ぎてくわけで。

「ううー、帰りたくないよお」「突然私達の前に現れた、旅の扉。
恐らくこれを潜れば帰れるだろ?」「仕方ないよ沙耶。じゃあ、階。俺達はこれで」「うん……ありがと。エイト、沙耶……」「楽しかつたよ。料理もとてもおいしかつた」「うう……兄貴、沙耶嬢ちゃん。また来てほしいでがす

少し、後残りのあるままで。

「それじゃあみんな、ありがとうーー！」
元の世界へと、帰還します。

この後、このことをゼシカとヤングガスに話したら怒られた。
心配かけたことと、一人だけ行ったことも含めて。

……結論、ゼシカ様こえー。

特別「ラボ回」～異世界の勇者と異世界の一般人～（後書き）

ふいー、緊張しますなあこりゃあ。

と、いうわけで今回御徒さんの作品『ドランクエスト？』
異世界の勇者の生きる世界～とのラボでした。

あちらでは細かな設定とギャグ要素の入った素敵な作品が投稿さ
れています！

ぜひ、あちらの方も読んでみてくださいっ！

直接リンクは貼れないでの、URLコピーだけでもさせていただき
ます。

<http://ncode.syosetu.com/n4173u/>

それでは皆さん、次の回でお会いしましょーー！
しーゆーねくすとばーーー！

ククールつてパッケージにいたつけ？（前書き）

久しぶりです！

やばいもつ、8のシナリオ忘れてきてしまった！

……もう一度プレイし直すかな？

でもドラクエって結構時間がかかるんだよね……。

ククールつてパッケージにいたつけ？

「でもまた、マイエラ修道院に戻るの……？」

「正直乗り気じゃないんだよね、またあそこ戻るの。めんどくさいし。

「ゼシカが言つてるんだから仕方ないじゃないか……」

「あつしは先に進むたいでげすよ」

文句ブーブー言つ私達だつたけどそれをゼシカにはつまつ伝えるのは無理だった。
なぜなら……。

「…………」

ゼシカの周りが、恐いから……。

「なんかいつの間にかリーダー代わってるよねエイト

「……こんなつもりじゃなかつたのに」

あ、もう建物が見えてきた。

「あの……ええと……どちら様で？」

「そんなのいいから早くククールつていうバカを出しなさいよー。」

「ひいい！」「めんなさい」「めんなさい！ なんか分からぬいけどごめんなさい！」

「ちょゼシカ！？」 まずは落ち着けよー。」

「だめだゼシカがなんか借金取りみたいになつてる！

「えーと、僕達はククールさんに渡したいものがありまして……」

「きた！ ハイトの仕事スマイル干渉！

「そうよー。だからそこどきなさい！」

「ぶち壊した！」

「わわわ分かりました。どうぞ中へっ！」「すごい恐がつてゐるよ」の人。

「とりあえず私達は一般人は入れない場所に入つた。」

「……なんか悪い予感がするな」

「……エイト？ ……足にスライムベスついてるよ」

「ええええ！？ なぜ！？」

えぐい。スライムベスは踏まれていた。

つか、踏んだまま歩いていたのかエイトさん。

「ククールつていう奴でしたつけ？ ビリにこるんがすかね？」

「とりあえず、探そう。でもその前に……」

「エイトがとりあえず歩きだす。ビリに向かいつのかつて？ もちろん

。……。

「壺……割るぞ」

「やつぱり……」

もつ恒例になつてゐから慣れてきたよ。

「ほー、地下もあるんだなー」

「うわー、暑そつ……」

一時間ほど経つて、もうこの建物にも飽きてきた。

「入つてみるがすよー！」

分かつてゐるわい。

「……牢獄か！」

「そんな感じだね……」

静かでなにもない部屋がたくさんあつた。

「ういう静かなところはあまり好きじゃないんだよね……。誰かいるぞ」

「なんかこの感じメタ〇ギアみたいだよね」

「黙ろうか沙耶」

「はー……」

「分かりましたよ、沙耶さんはもうダンボールの中に入つておきますよふんふん。

つてダンボールなんか持つてきてねーよ。

「ちょ、ちょっとしゃがんでみんな！」

おうおう、エイトさん。盗み聞きですかい。

「あ、クックルージャン」

「（静かに喋つてくれ沙耶ー。）」

「（はーー。）」

「またお前がドーで喧嘩を起したといつ奴は」

「あーあーそうですよばいはい」

「なんだその態度は！ 反省してるとか！」

「シテマスヨー」

「（あれ、マルチヨロセドジャナ？。）」

「（あー……あのイヤヤミ野郎ね。）」

「（あの二人こんなとこりでなにをしてるのかしら？。）」

「（まさか……ボーアズラブ的なこと？。）」

「（そ、それは無いと信じたい。）」

「（兄貴……。もうこの部屋から出やしちょうよ。……。）」

「（いやでも、来たからには後戻りはちよつと……。）」

「まったく……お前のせいで修道院は悪い噂ばかりだ

「それはそれは。いつも大変だねえお兄さん」

「お前など弟ではない！」

「やうカツカせずに。あんまし怒りすがるが広がるぞ？。」

「よけいなお世話だッ！」

「（あの二人つて兄弟だったのかな……。）」

「（たしかに似てる気もするわね。）」

「罰としてお前は、外出することを禁する。いいか、ずっと修道院

「ことば」

「えええ～」

「文句あるなら追い出すぞ」

「はいはい、分かりましたよ団長わん

「ふん」

「（やばー、一人がここから来るやー。）」

「……ん？ だれかいるのか？」

「（どうしよう沙耶ー。）」

「（任せんしゃーー。）」

沙耶さん奥義を見せてやるわー！

「（よりーん）

「なんだ猫か。どうする兄貴ー」

「ふん、猫など放つておけ。とこうか私はお前の兄じやない」

「　　（（（アホか）））」

ふー、どうか行つたぞ……。

「誰もいなくなつた……よしセーフー！」

「あんなのでいけるもんなんだな……」

「あー、どきどきした……」

「なんとかセーフでがすね……」

「やっぱ私、モノマネの才能あるね」

「絶対無理だと思つ」

「全員否定つー？」

ひどい……結構モノマネ自信あつたのに。

今ならドリ○もんとかも出来るんだぞ！

「よし。せつせとククールんとこ行つて指輪返しここにいり

「そりいえばそんな設定あつたね

「忘れてたのかい！」

「いやだつて……ねえ？」

クックルーに会つたことも正直忘れてたよ。

「こんなとこはもうおさらばでがすよ……」

「たしかに……牢獄みたいのは嫌だわ」

階段を登つて私達はククールを再び探しに行く。

「つていつても、すぐいたね。おーいクク山ー！」

「……クク山？ つてエイト達じやないか」

ギザ男発見！ ようやく先に進める！

「…………」

「どうしたのエイト？」

今日はなんかエイトが難しい顔をするのが多いなあ。

「なんか、やつぱり嫌な予感がするぞ……」

「……エイトもか？ 実は俺もするんだよな」

「クク山も？」

「クク山はやめてくれ」

「そんなことよりも！」

ゼシカが一喝する。出ましたオカン！

「あんたからもらつたこの指輪いらないから返しにきたわよー！」

「ええ？ ああ、それか！ ……その手があつたか……」

「は？」

なにいつてんのこいつ？ みたいな顔をゼシカがした。

「さつきからまがまがしい嫌な感じがするんだ」

「さいでつか」

だめだゼシカが関西人みたいな感じになつてるよ……。

「院長の身が危険だ……。見ててくれないか……？」

「とはいつても、なんであつし達が……」

「ドルマグスのことだな」

急にエイトが喋つた。

……ドルドルが来ているのかー？

「どうこう」とエイト！？

「さつき聞き込みをしていたら誰かが言っていた。道化師……ピヒ口のような奴が、ここに院長の部屋に入つたってな

「……っ！ ドルマゲスが……！」

ゼシカも緊張したような顔つきになる。

ヤンガスも同じ……私はあんまし、驚いてはいないけどね。「行こう。その院長さんの部屋に」

「うん！」

「でも待て」

ククールが私達を遮る。

「ここからじゃ院長の部屋に行けないぜ」

「どうこう」と？

いやあそこにはそれっぽい扉ありますやん？

「あそこはこここの僧侶達が見張っている。あれじやあ中に入る」とは無理だ

「じやあ、どうせここで行くのー？」

「その指輪だ」

「へ？」

ククールがゼシカの持つている指輪を指す。

「マイエラ修道院から川沿いに歩いていくと、古い壊れた建物があるんだ。あそこからその指輪で入ることができる」「遠回りするのか……」

う、嫌だなそれは……。

「仕方ないだろ？ それしか方法はない」

「ククールは行かないの？」

私はクク山に聞く。そして念じる。『お前も行けや！』と……。

「ふつ、生憎俺はここから離れてはいけない重要な役割があつてなすまない

ああ、そういえばマルチヨロさんからなんか言われてたね。

「ドルマゲスの奴がいるとするな、怠ぐでがすよ。」

「ああ。オティロ院長さんも危ない」

「オティロさんて誰?」

「え……じいの院長さんの前らしきヤツ……」

なんか知らない間にエイトは聞き込みばっかりしだったんだね。さすがー。

「よし! じゃあ行つてこよ!」

「頼んだ。……院長を助けてくれ」

「ま、仕方ないわね」

「いくでガンス!」

「……疲れたなあ。明日にじてほしになあ。」

私達はやる気満々(一怒除く)で外に出た。

ククールってパッケージにいたつけ？（後書き）

ククールってパッケージにいましたつけ？
裏面ではひつそりと居たけど表では3人(+二匹)のみ。
トロデと姫様もいたのにククールだけいないぞww
敵キャラのククールの像だけ一番経験値低いし……
公式でもこんな扱いかククールww

おはな様ごめんねごめんねごめんね（漫畫セイ）

お久しぶりです。いや、本当に……。

長くなってしまった申し訳ございませんでした。

それでも久しぶりーと見てくれる方はマジで神です……ははーっ

！

おばけ怖いまじ怖いまじ怖い

ククールというバカでギザでおまけにチャラ男に頼まれて一時間ほどが経つた。

「こら辺の敵、意外と強いな」と

日イチは顔の汗拭い、鍼をこねる。

「たしかに、辛くなつてきただね」

セシカモ痕れの様子かよく現れていた

「上昇しようよ」

正直、レベルが上がつてないんだよね。

「沙耶嬢ちゃん……。今はオディロ院長のどこに行くのが目的ですが、槍とかも使い慣れてはいるけれども、新しい技覚えたいじやん？すよ」

ヤンガスが少々呆れたように私に向かって言った。

たね。

旧修道院の跡地とやらを探した。が、全く見つからない。

え、まさかの「」で詰まつた感じ？

「ハヤト……、君、どうかな？」

「……………多分もうすぐ着くって」

いやいや、エイトさん！？内心凄く焦つてますよねえー！？

「ハマー、いつたゞぎに向かってゐるが。」

「め、目の前にお城があるでがんす……」

「後ろからギャー、ギャーと文句言われるエイト。

彼の方向おんちはもはやプロ級であった。

そして隣にあつた看板に書かれていた文字……それは、『このまま行くとアスカンタ城』であった。

「ほら、階レベルが上がって良かつたな～……なんちて」

後ろに振り向いたエイトは『気まずそう』……そして、爽やかに告げる。

「「「よくねえわ！～！」」

「『』、『めんつて！ 悪かったよ～！ わすがにこれは方向おんちすぐれたよ～！』

結局、修道院までワープし一から搜索を始めた私達であった。

「「」の指輪を「」にはめたら「」いんじゃないかしら？」

なんだかんだ言つてずっと持つてたゼシカちゃんが指輪をそつとはめた。

「お、おおー……動いてます、動いてますよおおお
「」と大きく指が動く音がした。

そして中から出でてきたのは……

「階段？」

「す」「い仕掛けだな」

「じゃあ行くでがす！」

みんな意気揚々と階段を下りて行くが……私はその場に突っ立つたままだった。

「沙耶？ はやく行け！」

「……もしかして「」、おばけとか……出たりしちゃう？」
恐る恐るとたずねたその時

「ぎやああああああああああ……」

「ひやああああああああああ……」

大きなヤンガスの悲鳴に驚いた私はすかさず悲鳴を上げた。

「ちょ、どうしたのよヤンガス！ 沙耶も！」

中から聞こえてきたのはゼシカの心配する声だったが私には聞こえなかつた。

「大丈夫か、ヤンガス！？」

「あ、大丈夫でがす。階段から落ちただけでがすから」

「…………あ、そう。沙耶、ヤンガスがこけただけだから平氣だよ」

「…………ヤーンーガースウー？」

「」の中年おっちゃんがつ！ 驚いたやんけ！

「しかし……沙耶がおばけ怖いとは……驚いたな」

「どうこの意味ですかエイトさん」

涙目になりながらも横田でエイトを睨んだ。

「でもたしかにここ気味悪いわね」

ゼシカも少し怖がつて見えた。気のせい?

「さつやとこんなとこはやく出るがすよ」

さつきから魔物もゾンビっぽいのばつかだし……もつやだ！」。

奥に、奥にと進んでいくとやくやく出口ひじこ場所まで着いた。

「よし、ここを上がればオティロ院長に会えるわ」

「運がよければドルマゲスがいるところだとね……」

「行くでがす！」

「みんな……はやく行つてえ……ここからもやく出るのよ……」

「次こそ必ず……被害は出やせなー！」

「兄さんの仇を……絶対……！」

「あつしは……なんか恨みあつたつけ？」

「もういいからさつやと行つよおおおお……！」

みんなが決意を固めてくるのはいいんですけども、早く出たいんですよ私は！

「ソウハ……サセナイ……」

小さく、でも確かに聞こえる声で。

私達の前にはおばけが○ ¥ヽ* . . . 。

「キキキ、キタ

「..」

「な、何者だつ..」

エイトがすぐさま剣を構える。

「ワタシハ……」「ノ修道院の……院長だつ……た」

「オーディロ也 ん！..」

「ち、沙耶！ オーディロ院長は普通に生きていねわよ..」

「」「ノ院ガ 感染症テ ナカマハ シンダ……」
幽靈は苦しそうな声で、少しずつ喋る。

「」「」「」

私達は、黙つた。

この人は苦しんでいるんだ。とても悲しくて辛いことに遭つてしまつて……。

「ノノ院ア マモレナカッタ」「ノ苦シ!! オ前達ニモ思イ
知ラセテヤル！」

「なんでそうなるの！..？」

「仕方ない沙耶！ やるしかないと..」

「兄貴！ 危ない！」

エイトに呪いがふきかかる。……が、書き消された。

「ナゼキカナイ！」

やはりエイトには呪いを無効化することができるのはかもしれない。

攻撃、防御、攻撃と永遠に続くよじな長い戦いにも、よひりへ終わりそうだ。

自分達もそうだが幽靈……なげきのぼうれいは、体力が大分減つているだろう。

「ワタシハ……ワタシハッ！」

「……苦しいんだよね」

その途端、なげきのぼうれいは攻撃をやめた。

エイト達はその隙にと攻撃を仕掛けようとしたが、私は手で止めた。

「沙耶……」

エイトが少し悲しそうな顔をするのは、私の顔も悲しい顔をしているからだろうか。

この人は悪くない。ただ、成仏できずにいるだけ。ここで、永遠と苦しみ続けるだけ。

「みんなの所に行きたいんだよね？」

「ミンナ……ミンナ……ワタシヲオイテ……」

「きっと、待っていてくれているよ」

「ハヤク……ミンナのトコロへ……行キタイ……！」

「強く願つて……強く……そしたらみんなの所へ行けるから私はキヨヒと深く目を瞑る。

「優しさほど……強い気持ちは、ないから」

なげきのぼうれいから……暖かくて白い光が溢れた。

その光はそっとなげきのぼうれいを包み……癒していく。

「ありがとう……お嬢さん」

そして、その光とともに消えていった。

「さすがだな、沙耶」

「へつ？ そ、そうかな」

あまりにも幽靈さんが可哀想だつたから本氣になつたけど……なんか照れくさいな。

「沙耶もちゃんと感情があるのね」

「どういつ意味ですかそれはつー」

ゼシカも目をこすりながら微笑んだ。

「それじゃあ、行きやしそう。……オーティロ院長を、救うために」

「……………」

私は、田の前のはじごに足を掛けた。

……なげきのぼづれいに、さよならをしながら。

お好みで希望して下さい（後書き）

めずらしくシリアルアスでしたね。ほー。
やつぱり田頃からギャグだらけだと本物のシリアルアスになると違和
感ありますぐだなあ……。
この小説はギャグばっかりじゃないとだけ言えときます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2990r/>

ドラゴンクエスト? 空と海と大地と呪われし姫君と宝箱少女
2011年11月17日19時12分発行